
BLAZBLUE —CONTINUUM SHIFT—

ミツルギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A Z B L U E | C O N T I N U U M S H I F T |

【Nコード】

N 5 3 4 0 X

【作者名】

ミツルギ

【あらすじ】

事象管理システムタカマガハラは、”蒼に満たされた完璧な世界”を目指して確率事象を引き起こし、都合の良い可能性を導き出すとしていた。様々な可能性が現れる中、遂にラグナが宿敵ハザマ（テルミ）と対峙する。しかし圧倒的な戦力差を見せ付けられ、とうとうムラクモが真の姿を現そうとしていた。

降臨

轟音が辺りの空気を支配する。天高くそびえる、まるで繭のような翼。その下にはまるで祭壇の様な巨大な建造物。中央には紋章が描かれていて、生きているかのような錯覚を起こすほど、赤い光が脈動して辺りを走っている。

その前には男が二人。一人は苦痛の表情を浮かべながら片膝を着き、もう一人は対称的に満面の邪悪な笑みを浮かべながら立っている。満面の笑みを浮かべた緑髪の男、ハザマは、両腕を広げて天を仰ぐ。それに呼応するかの様に、紋章が大きく脈を打つ。

「さあ！ムラクモの覚醒だ！」

もう一人、片膝を着いた男、ラグナも天を…否、翼の繭を見上げていた。

「今、この世界は全てが嘘だ！！嘘、嘘、嘘、嘘だらけだ！だからよお…俺様が真実って奴を見せてやるよ！絶望って名の真実をな！」

ハザマが目を見開く。

「”スサノヲ”の御名において命ずる…！起きやがれ”ムラクモ”！否…神殺しの剣”クサナギ”よ！貴様のその刃で、全ての”嘘”を薙ぎ払え！」

繭が花開くように口を開ける。不気味なほど溢れ出す光。その光からは”蒼”い瞳をした金髪の少女が降り立つ。身体のひとつを白い装束で包み、額当てには漢数字の”十二”が彫られている。ラグナが驚愕の表情を見せ、少女を見据える中、ハザマが高笑いを始

めた。

「ヒャーハツハツハー！！真の”蒼”を手に入れたぞお！！」

そして誰かに話しかけるかの様に、再び天を睨みつける。

「さあ、俺を止めてみる！マスターユニット、アマテラス！！」

絶望の降誕。

破滅と終焉の時。

空は世界の終わりを表すように、濁った光を放つ。

少女は依然として、無表情のままそこに君臨していた。

降臨（後書き）

BBCSEXの稼動記念にCSのトゥルーエンドを小説にしてみました。正直まだまだ文章力に自信はありませんが、最後まで見ていただけると幸いです。あ、ネタバレと流血表現に気をつけてくださいね。

ムラクモ

史上最高額の賞金をその首にかけられ、世界最強と謳われた通り名”死神”こと、「ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ」は焦燥していた。目の前に降り立つ少女。そしてその少女の降臨と共に勝ち誇った笑みを満面に貼り付けている男。全てが最悪の展開へと進んでいた。

少女の本来の名は「ノエル＝ヴァーミリオン」。統制機構術式部隊の第三師団に所属している、ラグナの記憶を揺さぶる面持ちを持つ。しかし彼女は今、ハザマの謀略と計画のせいで真の姿である”ムラクモ”に変貌している。その瞳に光は無く、あるのはただひたすらに”蒼”。

白い装束に身を包み、額に”十二”の漢数字を刻み付けられた鎧を身にまとうノエル…いや、ミュー・トウエルヴは、何の感情も顔に出さずに立ちすくんでいる。

「テメエのその喉元にこの刃を突き立ててやるぜえ！ヒャーハハハハ！！」

誰に語りかけているのか、空を仰いだままのハザマは相変わらず満面の笑みで吼えていた。

一方、ラグナはミューを見て叫ぶ。

「おい！ノエル！ノエルなんだろ！？」

ラグナは密かに願っていた。自分の問いに答えてくれ、「違う、私はノエル＝ヴァーミリオンだ」と返してくれ、と。しかし返ってきたのは無言の返答と、小さな白銀の刃だった。

咄嗟に刃を愛用する大剣で打ち落とす。刃の出所は、今正に本性をあらわにしている「ハザマ」…否、「ユウキ」テルミ」だった。

「うるっせえよ、子犬ちゃんよ、キャンキャン喚くんじゃねえ！」

言葉通り、まるで野犬でも見るかのような眼差しを向けるハザマ。ラグナは負けじと睨み返した。

「このクソ野郎が…！」

しかし、殺気を全開にした死神の前でもハザマはその余裕さを崩さなかった。

「どうしたよ？俺様が憎いんだろ？ほら…もつと憎め、もつと憎めよ、子犬ちゃんよお」

ラグナにとってハザマは忌むべき相手。言われずともすでにありつたけの憎しみをぶつけている。だが憎めば憎むほどハザマの思う壺になっている。それはここにたどり着く道中で散々言われてきたことだ。

だがハザマは物足りなさげに首を横に振る。

「ああ、これじゃまだつまんねえなあ…。クサナギ、ちょっと来い」

「クサナギ」と言ったハザマの言葉に反応し、ミューはハザマの近くにやってきた。ラグナの目の前でミューに寄り添うハザマ。

「ノエル！」

「いやゝ可愛いねえ。本当、最高の剣に仕上がったもんだぜ」

ハザマは恍惚とした表情でミューを見る。

「ラグナ君？この剣はたった今から俺様のモンだ。ツハハ！見るよ、この肌触り！まるでテメエの妹の様だぜえ！？」

装束の下に手を入れ、腹をなぞる。この行為とハザマの言葉に、ラグナは付けられた傷に構わず地を両足で踏みしめる。
更に開かれた傷から溢れた血が、地面に撒かれる。
大剣を携え、全開だった殺気を更に解放する。

「テメエはマジぶっ殺す！！」

ラグナの激怒の表情と雰囲気満悦したのか、ミューから離れるハザマ。

「おーおー、やっとその気になったか…！オラア！遊んでやるから来いや、子犬ちゃんよ！」

この言葉が引き金となり、ラグナは右手の甲を前に突きだし、ハザマは両腕を交差させる。

空気が震え、魔素が渦巻く。原因は、今から解き放たれる、二人の身に宿る強大な力。

「第666拘束機関解放！次元干涉虚数方陣展開！」

右腕を振り下ろし、天を仰いで吠える。
両腕を横に風呂敷、天を仰いで叫ぶ。

「蒼の魔導書、起動！！」
プレイブル

「フレイブル碧の魔導書、起動！！」

今、蒼と碧が激突する。

「いくぞテルミィ！！」

「かかって来い！ラグナザブラッドエッジ！！」

ブレイブルー

「行くぜえ！」

ハザマが腕を振るうと、その眼前の空間から緑色に染まったチエーンがラグナに向かっていく。ラグナにはそれが何か分かっていた。咄嗟に後ろに飛び、そこに先端の蛇の頭が空間にかじりつく。するとハザマがそこにいつの間にか引き寄せられ、ラグナに向かっていった。

アークエネミー

事象兵器、蛇双・ウロボロス。それがハザマの使う武器の名前だ。

事象兵器とは、100年前世界に蹂躞し悪夢を与えた怪物、「黒き獣」に対抗するための武具だ。全部で10器存在し、その内のいずれかは黒き獣を討ち滅ぼした“六英雄”に与えられている。そう、ハザマ・・・否、ユウキィテルミもまた六英雄の一人なのだ。

ウロボロスは精神への攻撃が本来の性能だが、こうして空間を掴んで移動することは勿論、ワイヤーチェーンのように物体に引っ付いたり、相手に絡んでいたりも可能だ。

「ヒヤッハアー！」

移動してきたハザマが一声上げると、ナイフを一閃。ラグナはこれを大剣で防御すると右腕でアッパーを仕掛ける。勿論牽制のつもりだ。しかしハザマは意外にも避けなかった。それどころか右腕を掴み、ラグナを持ち上げ蹴り飛ばした。

「ウロボロス！」

すかさずウロボロスを召喚し、ラグナを掴む。そのまま強引に地

面に力任せに叩きつける。

一体そんな華奢な体の何処にそんな力があるのか。世界最高額の賞金首は成す術も無く弄ばれ、地に這い蹲っている。

「ゲホッ！……っ、まだだ！！」

少し置かれた距離をつめるように、ラグナは左拳を突き出して突進する。

「吹き飛ばー！」

右腕を持ち上げ、そこから発せられる地獄の顎^{あぎと}がハザマに牙を剥く。

「ヒッヒッヒ…！」

「！？」

はずだった。

しかし何も起こらなかった。

気がつけば、ラグナの右腕に宿る最強の魔導書、蒼^{フレイブル}の魔導書の機能が完全に停止していた。否、停止していたわけではなかった。蒼の魔導書の力がなんらかの力に打ち消されていたのだ。

「オラア！！」

「くっ！」

力と魔力をためた一撃が、足元から襲ってくる。ラグナは防御しようとしたが、体に力が入らなかった。

「ぐっ…くそ…！」

ドスッ！！

鈍い音と共にラグナの体が打ち上げられる。

打ち上げられたラグナの体はそのまま後方へ飛ばされる。

「オイオイどうした子犬ちゃんよ！まだ全然楽しめないぜ！？」

「デメエ…！」

「やつぱやりずれえかな？俺様の碧の魔導書に生命力を吸われたらよお…！」

傷つけられた体を無理やり起こすラグナ。

ラグナの肉体はそれ全てが碧の魔導書である。ラグナの蒼の魔導書がもたらす生命力と魔力も凄まじいが、ラグナの右腕の場合生命力の循環が不完全で、使い過ぎれば魔導書に意識や肉体が喰われるという惨事を引き起こす。対してハザマの肉体は生命力の循環が完全であると同時に、周囲の方陣が周りの生命力を吸収、加えてラグナの魔導書を完全に無力化させる機能まで付属しているのだ。

つまり、戦う前からラグナの劣勢だったのだ。

「素直になれや子犬ちゃん…！」

ハザマは不敵な笑みを浮かべながら、いつの間に近づいたのかラ

グナの両腕を一瞬だけ拘束し、”後ずさりしないように”振り上げて強引に開放する。ラグナは両腕を上げ、無防備になってしまう。

「フレイブル テメエの蒼の魔導書じゃ俺様には勝てねえんだよお!!」

その隙を逃すはずもなく、ハザマの両腕に仕込まれていた白銀のナイフが無数の刃閃を描き、ラグナを斬り裂いていく。止めといわんばかりにハザマの背後から現れた巨大な蛇が三頭、ラグナに突進し吹き飛ばす。

「ぐああああああっ!!!!」

二転、三転と地面に体を叩きつけられ、傷口をえぐられる。

吹き飛ばされた体はその動きを停止して数秒後、ラグナは自分がアンチ効果を受けていることをようやく思い出していた。

体の痛みには耐えながら。憎むべき怨敵を睨み付けながら。

ユウキ「テルミ」

倒れたラグナに顔を近付けるハザマ。その顔は狂気と余裕に満ち、統制機構衛士としての面影は最早無い。

「つまんねえなあ…つまんねえよ、仔犬ちゃんよ！」

「ぐっ…はっ…！」

本来、ナイフで斬られた傷などは己の内にある魔導書が勝手に治してくれた。しかし、世界最強と謳われた魔導書もハザマの前では何の意味もなさなかった。

ラグナは歯を食いしばった。道中何人かの顔見知りには、

「お前では絶対にテルミは倒せない」

と言われてきた。しかし感づく事は出来ても、テルミは自分の全てを奪った者。そんな事を言われた程度で引き下がる訳には行かなかった。

「おーおー、惨めだねえラグナ君。御自慢の蒼の魔導書も俺様の前
フレイブル
じゃ無駄。無駄なんだよ！ヒヤッハハハハ！」

「クソ…が…！」

ハザマを睨みつけるラグナ。ハザマはそんなラグナの表情を、網膜に焼き付けるかの様に覗きこむ。

「あれ？もしかして悔しいの？悔しいのかよラグナ君？…でも分か

ってんだろ？ テメエじゃ俺には天地がひっくり返っても勝てねえんだよ」

ラグナから視線を外し、外を見るハザマ。

「っと、遊び過ぎたか。おい、クサナギ」

呼び掛けられるミューは無言無表情で立ちすくんでいる。ラグナはどうにか身体を動かし、ミューを見る。

「テメエはすぐ窯ん所行け。んで…」

ハザマはミューに親指を下に向けて下げて見せた。

「アマテラスをぶっ殺してこい！」

「了解」

淡泊にそれだけ返すと、ミューは何処かへと立ち去って行った。ラグナはミューを追い掛けようと身体を引きずる。

「ノエル… 待て…！ 行くなノエル！」

ラグナがそう叫んだ瞬間、ハザマがラグナの横腹を蹴り上げた。

「ごあつ！」

「しっつけえんだよ仔犬ちゃん！ あれは、”クサナギ”。ノエル!! ヴァーミリオンなんかじゃねえ、ただの人形なんだよ！」

もう一度、力強くラグナを踏み付ける。何処かの骨が折れたのか、鈍い音と共にラグナが吐血する。

「テメエと同じ」、創られた人形なんだよ」

ラグナはハザマを再び睨みつける。ハザマはその表情を見て、実に残念そうな顔をする。

ラグナは既に、自分が”創られた者”である事を知っていたのだ。“世界の破壊者”、そう宿命付けられ創られた人間。それがラグナ”ザ・ブラッドエッジの”役割”。

「…その眼、既に知ってたのか。ま、どうせ猫か何かに教えて貰ったんだろうが…」

「うるせえぞ……、つぐあッ!」

ハザマは再び忌ま忌ましげにラグナを踏み付ける。

「まったくまんねえなあオイ!それにテメエの保護者気取りの、あのクソ吸血鬼も今じゃ闇の中でおねんね中だろうから…!」

ラグナは目を見開いた。

ハザマが言う”吸血鬼”とは、「レイチエル”アルカード」。ヴァンパイアー族アルカード家の現当主である。常に暇潰しと称してラグナをからかっているが、実はラグナの命の恩人。そして蒼^{ブルー}の魔導書を与えた張本人だ。強力な魔法を扱い、ラグナの知る限り、彼女程実力の高い存在は2、3人居るか居ないか。そんな彼女が、ハザマの言った通り簡単に捕まるとは思えなかった。

ラグナはハザマに向かって吼えた。

「テムエ！レイチエルに何を…ぐあっ！」

ハザマを問い質そうとした瞬間、顔面を蹴られる。

「ああもう…何かテムエ虐めんの飽きてきたわ。どうせ何やっても負けねえの分かってるし」

ラグナに背を向けたハザマは、その場を立ち去ろうと、ゆっくりと歩きだす。そして再び忌ま忌ましげな表情を見せる。

「……………つか…タカマガハラ超ウゼエ」

立ち去ろうとするハザマを引き止めようと、立ち上がるラグナ。しかしもう足に力がほとんど入らない。ラグナは大剣を支えになんとか立っていた。

「待てよ…。まだ俺はやれんぞ…」

これだけやられても、まだラグナの闘志と殺意は消えていなかったのだ。

「”約束”したんだよ…。俺は絶対諦めねえ、人として…人間として最後まで戦う！最後の最期までだ！……………テルミ…”遊んでやる”から、かかって来い…！」

この言葉が、今度はハザマの逆鱗に触れた。後ろを振り向き、右手に魔力を溜める。

「ウロボロス!!」

ゆっくりとした足取りでラグナに近付き、ウロボロスのある程度の長さまで召喚する。

「調子に……調子に乗ってんじゃねえぞ!このクソガキが!!」

ウロボロスを振り回し、その先端の牙でラグナを傷付けていく。

「ぐっ、うおっ!!」

「遊んでやるだあ?テメエ如き屑が俺様になんて言っただあ!?!」

容赦ないウロボロスの鞭攻撃。ラグナは剣を盾に防いでいるが、完全に防ぎきれている訳ではなかった。

「グアアアッ!!」

「死ね!死ね死ね死ね死ね!!」

ラグナの身体から次々と血が吹き出す。

「ガアアッ!!ぐっ……!!」

「オラオラどうしたあ!命乞いの一つでもしてみせろよ!ああ!?!」

「ガア!うるせえ……グハッ!……ぞ……クソやろ……ゴオッ!」

とうとう崩れ落ちるラグナ。ハザマはウロボロスを消し、ラグナの首を掴んでそのまま乱暴に胸部を蹴り飛ばす。

「ゲホツ…！」

「なぐにが、「人として最後まで戦う」だ？出来もしねえ癖にほざいてんじゃねえよカスが！」

「ハア…ハア…」

「見ろよ！テメエは」あの時”と同じだ！結局俺様を止められずに死にかけてんじゃねえか！」

あの時。ラグナが全てを失った日。何も出来ずに弟と妹、そして母親代わりだったシスターを奪われた日。

ラグナはハザマを見据える。ハザマの言った通りだ。自分は結局何も守れていない。

「まあでも、テメエには一応感謝しとくか。黒き獣を倒して分かった事も、なんやかんやでテメエが居なきや成り立たなかったしな。色々俺様の役に立ってくれたお礼に、この場でテメエの”戦い”を終わらせてやる…。いや、俺様って超優しい！」

「テ、メエ…！」

今のラグナに、とどめをかわせるほどの余力は無い。

再び右腕を構えるハザマ。

「んじゃ、まあこれがその”最期”ってやつだ。…死ねやラグナ」

ウロボロスの牙が獲物に向かって伸びていく。ラグナはそれがスローモーションに見えた。

「（…すまねえ…師匠…）」

自分を育ててくれた、戦いの師匠にして六英雄の一人、獣兵衛。

「（…すまねえ…ジン…）」

狂気に染まってしまった己の弟、ジン。

「（…すまねえ…サヤ…）」

取り戻す事の出来なかった妹、サヤ。

「（…すまねえ…レイチエル…）」

命の借りを返せなかった吸血鬼の少女、レイチエル。

「（…すまねえ……ノエル）」

結局止めることの出来なかった、妹の面影を感じる少女、ノエル。
助けられなかった人々に別れは済み、ラグナは静かに目を閉じた。

ラムダ（ニュー）

目を閉じたラグナは痛みを覚悟した。ウロボロスが自身の体を貫き、肉をえぐるのだろう。

しかし、痛みはいつまで経ってもやってこなかった。

代わりに、何処か遠くで血が飛び散る音が聞こえた。

目を開け、前を視認する。そこには先程ここに居た、ミューと全く同じ顔をした少女が居た。少女の背中からは血が滴り、ラグナの盾のつもりなのだろうか、抜けていく力をなんとか振り絞って立っていた。

彼女の名は「ラムダ・イレヴン」。模造ムラクモユニットを装着した、「ココノエ」という科学者が開発した”人形”である。イカルガ内戦で機能が停止していた肉体に、カグツチの窯で精錬されていた「ニュー・サーティーン」の魂を植え付けた存在だ。ラグナが初めて遭遇した時、彼女は完全にココノエの人形と化していた。

しかし、彼女の中にあるニューの魂が人格化し、ラグナにとどめを刺すのを拒んだ。ニューのラグナに対する想いが、そんな結果を生んだのだろう。

そして今も、彼女はラグナの盾となつてハザマの攻撃からラグナを守っている。

「ラグ…ナ…」

「…ニュー、か？」

そんな光景にハザマは再び激昂する。

「どいつもこいつも…！人形の分際で俺様に盾突いてんじゃねえ！」
再びウロボロスを召喚し、まずはラムダを始末するつもりだろう、
ラムダに攻撃を続けた。

「邪魔すんじゃねえよ！とつとと死ねや！」

「…っ…！」

ハザマは更にナイフを複数取り出し、ラムダに投げつける。ナイフの一本がラムダのバイザーを掠め、その衝撃でバイザーが砕ける。

「おい…ニューー！」

ラグナはラムダに駆け寄ろうとしたが、力が入らない。どうにか身体を引きずってラムダに近寄る。

ラムダも血を吹き出しながらラグナに歩み寄る。

「ラグナ…。…ああ…ラグナあ…久しぶりだね…」

ラムダの身体がラグナに倒れ込む。

「…ニューーね…境界で、ずーっと…ラグナの夢ばかり、見てたの…」

ラムダの目は既に虚ろになっている。

「だからニューー…寂しく、なかったよ…」

「……！」

ニユーは統制機構カグツチ支部の窯で精錬されたムラクモ。ラグナはそんなニユーを破壊する為にカグツチにやってきていた。自分の妹とそっくりな顔をした少女を。統制機構へのあらん限りの憎しみをぶつける為に。

しかしニユーは反対にラグナを求めていた。精錬されている最中で、度々記憶を横切るラグナの顔。それが愛おしくて仕方がなかったのだ。

「……すまねえ……ニユー……！」

謝罪と後悔の念がラグナを埋め尽くしていた。

ラムダの身体が淡く光り、粒子となって消えていく。

「ニユーは……ラグナと……」

——ずっと、一緒だよ——

ラムダの見た柔らかな笑顔が、ラグナの見た”ニユー”の最期だった。

ラグナの悲哀の感情に呼応するかの様に、右腕の蒼の魔導書フレイブルが小さく疼いた。

「…記憶の封印が不完全だったか…。まさか最期にあんな行動を起こすとは…」

ラムダの製作者、ココノエは研究所で佇んでいた。今までのラムダの行動は全て監視していたのだが、途中ラムダの行動が制御不能になった時点で、母親の敵、テルミを倒す事はほとんど諦めていた。ココノエ自身、ラムダの記憶が蘇ったのが想定外だったのだ。

「…………いや、もしかしたら、私自身まだ迷いがあったのかもしれない…。今となっては全て手遅れだが…」

そんな折、消えたはずのラムダの反応が別の箇所から聞こえた。すぐに位置を確かめるココノエ。

「…なんだ…この波長は…？」

「…この…馬鹿野郎が…！」

ニユーの想いに応えられなかった後悔。自分の目の前で死なせてしまった後悔。あらゆる後悔の波がラグナを押し寄せていた。

「なんで…なんで俺なんかの為に…テメエが…」

地面に拳をたたき付ける。

「なんでデメエが死んでんだよ馬鹿野郎!!」

そんな時、頭の中に声が流れ込んできた。いつかの日に感じた、干渉の術式だ。

『おい! 貴様、ラグナ!! ザ!! ブラッドエッジか!?!』

「っ!?! ココノエか?」

ラグナとココノエはラムダの一件ですでに知り合っていた。
言葉を続けるココノエ。

『馬鹿な! 貴様、ラムダのアイデア機関を吸収したのか!?!』

「アイデア機関!?!」

ラグナは自分の右腕を見る。蒼の魔導書フレイブルが何かを訴える様に輝く。

「おい、ココノエ!」

問い詰めようとしたが干渉を切断された。

しかしもし、今の話が本当だとしたら、ラムダの中にある何かは自分の身に宿ったという事になる。

「(…ニユー…お前…)」

果たしてそれが彼女がここへ来た目的かは分からない。だが彼女は、ラグナと共に在りたい、そんな事を節に願ってきた。

その時、思考を巡らせていたラグナに殺気に向ける者が居た。

「オイオイオイオイ、俺様シカトしてお涙頂戴かよ？…何なんだこの感覚」

目の前の憎むべき敵は、明らかに不愉快な感情を醸し出している。だがそれ以上に、ラグナは既に憎しみを越えた感情をハザマに抱いていた。

大剣を腰にしまい、血まみれの身体をゆっくりと持ち上げる。戦いの空気が、再び互いの間を渦巻いている。

イデア機関

鋭い眼光がハザマを捉えて離さない。ラグナは右腕を上げ、ハザマを指さして言った。

「…テルミ。テメエだけは…テメエだけはぜってえ許さねえ」

「許さねえからなんだあオイ！？良いからテメエも死ね！」

右手を握り締め、コードを唱える。

「第666拘束機関解放。次元干渉虚数方陣展開…」

ハザマはそんなラグナを嘲笑いながら、自らのブレイブルーの術式方陣を展開する。

「無駄だつて言ってるんだろ！あの人形がおつ死んだショックで、とつとつ頭のネジが全部吹っ飛んじまったか？」

目を閉じる。自身の中にある未知のエネルギーを認識し、同調を開始する。

その時、彼女の最期の笑顔と言葉が流れ込んできた。

—— ニューはいつもラグナと一緒に居るよ ——

「（ニユー。お前の力…貸してもらっぜ！）」

目を見開き、同調を完了させる。

「…イデア機関接続！」

「…何？」

「よく見とけ…これが”蒼”の力だ！」

ブレイブル
蒼の魔導書、起動！！

大剣を腰に携え、身構えるラグナ。ハザマは今までと違う気配に、珍しく警戒していた。

先程の戦いとは桁違いの魔力と生命力が、ラグナに供給されている。

「行くぞ！この毒蛇野郎が！！」

戦いの合図と言わんばかりに、地面を叩き駆けるラグナ。

一方、ハザマは妙な単語に少々混乱していた。

（イデア機関…？確か模造事象兵器を改造して進化させたものだったか…？）

そんなハザマの様子を全く気にせず、ラグナは腰にかけてある大剣を逆手で振り上げる。

（チツ…今はんな事どうでも良いか！）

「デッドスパイク!!」

「死ねや!!」

黒い獣の頭部と碧い蛇の鋏が激突、消滅する。

ハザマは舌打ちしながら後ろへ飛びのく………と、次の瞬間、

「逃がさねえ……!!」

という声と共に、ラグナの振り上げた右腕から再び獣が飛び出しハザマに喰らいつく。

「グハッ!!」

追撃は止まない。

獣は消えることなくラグナの大剣に再びまとわり、ハザマを頭上から再び喰らう。

「ガハア!!」

「まだ終わりじゃねえぞ」

「なっ!?!」

ドスッ!

地面に叩きつけられたハザマの体を持ち上げ、ラグナは鍛えようの無い鳩尾を思い切り拳で突く。

目を見開き、胃液を吐き散らすハザマ。そんな事も構わず、ラグナは右腕から発する闇を更に噴き出させる。

「この…ゴミ野郎がア!!」

冥府の神の名に相応しい一撃が頭部を撃ち、闇を纏った蹴り上げでハザマは後方に大きく吹き飛ぶ。

意識が明滅する。体にうまく命令が行き届かない。

ラグナの代わりに今度はハザマが地に伏す番だった。ハザマは両腕と両足で何とか起き上がって、四つん這いになっている状態だった。

「オオツ…ゲホツ…!!」

信じられなかった。さっきまで優勢に立っていたはずだった。だが現状、明らかにハザマは押されていた。

おそらくアイデア機関がラグナの蒼の魔導書に吸収され、ハザマの魔導書のアンチ効果を跳ね除けているのだろう。更にラグナの顔が

苦痛に歪まないのを見ると、生命力も正常に循環しているようだ。

ハザマの碧の魔導書が生命力を吸収しているにもかかわらず、だ。

今の蒼の魔導書は、間違いなくハザマの魔導書の力を上回っている。

「ざけんな……………」

たった一体の人形が割って入ったせい。

たったそれだけだ。

他の”可能性”ではハザマは絶対にラグナに勝利し、ミューを降臨させ世界を終焉に導いていた。だがムラクモを真似て創られた…まして本物にも劣る人形が割り込んだだけで立場が逆転している。

……………創られたモノの癖に。

無様に現世にしがみついている亡霊の癖に！

「……………死ね死ね死ね死ね死ね死ねエエエ！！！！！」

「ッ！！？」

膨大な魔力が、先ほどの巨大な蛇の竜を作り立ち上る。緑色の三頭の蛇竜はハザマを飛び越えラグナに向かって這いずっていく。しかし二度も同じ攻撃は喰らわない。ラグナもまた闇を更に増大させ、大剣を振り上げ突進していく。

「カーネージ……！！！」

大剣の一閃が先頭に立っていた蛇竜を砕き、

「シザアーツ……！！！」

右に回転して大剣を振り上げ、黒い虐殺の刃が残りの二頭を貫いた。だが、

「死ねや、雑魚が……！！！」

ハザマがラグナの懷にいた。さっきの蛇竜と共にラグナに向かっていき、蛇竜をおとりに使うつもりだったのだろう。

そしてそれはまんまと上手くいき、ラグナを仕留めんと最大限に力をためる。

「崩ッ天刃ッ……！！！」

文字通り天を崩壊させるがごとき蹴り上げが炸裂する。

しかしそれはラグナの頭蓋を貫くことは無かった。咄嗟に身をそらして、ハザマの蹴撃をかわしたのだ。

「マジ…かよ…!？」

「テルミイーーーーー!!!!!!」

ラグナの後ろでは、右腕に闇が絡み付いて膨らんでいた。大きく、太く、それはまるでかの黒き獣のように凶悪な獣の腕だった。

巨大で真っ黒な獣の腕は、凄まじいスピードで獲物を捕らえる。

「うおっ…!!」

次の瞬間、ラグナの体や腕に纏っていた闇が無数の刃を生み出し、ハザマの体を引き裂き、貫き、喰らっていった。

バズンッ!!

数秒後、ラグナの右腕に取り付いていた闇が爆発し、残ったのはカラスの羽根のような黒い雪となった闇の欠片、ハザマの生命力を吸収し今までのダメージを完全に治したラグナ、そして凄まじい裂傷が無数に体に刻み付けられたハザマ…否、自らが造った蒼の魔導書^ルに完全に敗北した、六英雄だけだった。

ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

逆転した戦局。力の差。ハザマはそれを体で感じ取っていた。傷だらけで痛みに耐えながら、ゆっくりと体を起こす。そして、数歩離れた距離にいる忌々しい”敵”、ラグナに視線を移した。

「な…何よ…。何が、どうなっちゃってるわけ…？」

「…テルミ…」

ラグナは大剣に手をかけたまま、ハザマを見据えていた。

このまま殺してしまっても良い。それでシスター達の敵は討てる。

だがある事情と、それとは違う何かの感情が、ラグナの手を止めていた。自分でも甘いと思っている。しかしこの感情の正体が分からない以上、手を出して後悔するのは御免だ。

そのまま手を出さずにいて数秒後、ハザマは途端に笑い始めた。

「……………クツ…ヒヒツ…ゲホッ…ヒツヒヤハハハ…！」

「なっ！？」

まだ何かを仕掛けるか。

意外と狡猾な目の前の男への警戒を強めながら、ハザマが突然笑い始めた理由が分からずに立ちすくむ。

ハザマは続けて言った。

「…これよ…これこれ…これだよ！俺様が求めてた…のは…」

息切れしながら出て来た言葉は、ラグナには理解出来ない事だった。

そのまま笑い続けたハザマはゆっくりと立ち上がり、懐からナイフを取り出し身構える。

「オラァ…！ラグナ…ザ…ブラッドエッジ…かかってこいよ…！」

「ふざける。もう勝負はついてんだろうが」

「まだだ！」

ダメージ。攻撃力。今のラグナとハザマはその差が歴然だった。しかしハザマは本気でまだ戦えると思っっているらしい。

そんなハザマの執念深い一面に、ラグナは思わず後ずさった。

「まだ…足んねえんだよ…。つまんねえんだよ…！」

覚束ない足取りでラグナに近付く。

「だからよお…俺様をもっと…楽しませろやあ…！！」

枯れ果てる寸前の声で言葉を発した後、ハザマはとうとう地に伏した。

ラグナはそんなハザマに、少しの哀れみを覚えていた。

ハザマはその視線を感じ取ったのか、ラグナへ顔を向ける。

「……………」

「あ…？何…見下してんだコラァ…！！…殺るなら…とつとと、殺れ

よお…グハツ……………！」

「…」ライフリンク”のせいで、テメエを殺すと後々面倒な事になんだよ」

余談だが、実は黒き獣の正体は、ムラクモがクサナギへ進化する過程で暴走した蒼の魔導書、つまりラグナとニユーだったのだ。その際必要なのは窯である蒼の魔導書、精錬するためのムラクモ…ニユー・サーティーン、この二人を接続するための命の回線、それがライフリンクだ。この回線がある限り、片方が死んでも片方の生命力と魂が死なない限り、決して絶命することは無い。

そのライフリンクはハザマとノエルの間でも存在していた。ノエルのムラクモを自信の碧の魔導書で精錬するつもりだったハザマだが、ノエルは真の”蒼”を継承した”眼”。自身の力で充分進化できるのだ。

その事を思い出し、背を向けて大剣から手を離すラグナ。

「それに、だ。テメエは今殺しても殺し足りねえ。そこで惨めに転がってやがれ」

「…この…がはっ！…ッヒヒ…チキン、野郎…が…」

この一言を最後に、ハザマは意識を無くした。

「……………うるせえよ。この蛇野郎」

倒れた男に悪口を吐き捨て、ラグナはミューの後を追っていった。倒れていたハザマは、不気味な笑みをそのままに横たわっていた。

ハクメン

統制機構カグツチ支部。その最下層。螺旋階段を下り、昇降機を使う事数十分。そこに彼女は居た。ハザマが精錬し昇華した、ムラクモ本来の姿クサナギ。その宿り木となっているミュー。

ミューは、ここで以前ニューが精錬された窯の前に居た。何を疑う事なく、何を思う事なく、窯が開かれていくのを見つめていた。轟音が彼女と、周りの瓦礫を震動させる。やがて口から巨大な剣の柄が出現し、その奥からは光が溢れている。

「ゲート、開放を確認」

無機質にそう言うと、窯へ入ろうとするミュー。

その時、奥で息を潜めていた気配が姿を現す。

「…来たか」

白い鎧を身に纏い、背中には身の丈ほどもある長刀を携えている。ミューは声のする方を振り向き、解析を開始。数秒でその者の正体を見抜く。蒼を継承した彼女は、世界、否、全ての真実を観測^みする事が出来るのだ。

「対象を、三輝神スサノヲユニットと認識。最重要破壊対象として記録されている事を確認」

ミューの背後で異空間が口を開き、そこから巨大な剣が現れる。スサノヲユニットを装着した男、かつて世界を救った六英雄が一人、ハクメンは背中の中^{アークエネミー}の長刀、事象兵器の一つ斬魔^{さんま}・鳴神^{おおかみ}を抜き放つ。

「人の作りし悪魔、神殺しの剣クサナギ」

名を呼ばれた少女は背後の剣を発光させ、自身に纏わせる。

「ペタル展開、最大攻撃態勢へ移行」

白き英雄は刀を両手に持ち、仮面に覆われ表情が伺えない顔をミューに向けて見据える。

「蒼”の少女よ、私がその苦しみから…お前を解き放つてやろう」

全身から殺気を放ち、死合いの構えを取る。

「我は白。世界を白く染め、無に回帰させし者」

神を殺す者と、悪を滅する者が対峙する。

「我が名はハクメン、推して参る!!」

「私の存在はクサナギ……………世界を滅ぼす者!!」

レイチェル「アルカード

ズブ、ズブ…。

空虚だが、そんな音が聞こえた気がした。

目を開けて頭上を見上げた…気がした。

周りを見渡しても闇、闇、闇。延々と闇が辺りを覆いつくしているだけ。

退屈な…自分の嫌いなとても退屈した世界だった。

こんな所に自分を閉じ込めた連中が憎らしかった。

しかし自分にはどうしようも出来ない。使い魔たちも役に立たない。

「…くっ…うおおおおおおお!!」

ガシッ!

そんな退屈した世界に異変が訪れた。

自分の肩を掴む、この感触。

かつて自分が救った小さい命だ。自分が守らなければ何も出来ないものだと思っていた。

だが…。

ズルッ！！

「…っりゃあああああ！！！！」

「…下品な雄叫び…」

けど、不思議だった。とても退屈しない。

嫌いじゃ、ない。

ラグナは息を切らしていた。ここまで走ってきて尽きる体力でも

ないのに。

それは、目の前にいるツインテールの金髪吸血鬼達を助けるために使った体力だからだ。

「ハア…ハア…このクソウサギ！てめらしくもなく捕まってるじゃねえよ！」

「あら…私にだって失敗する時もあるわ。『弘法も筆の誤り』というでしょう？」

「誰が弘法だよ…全く…」

助けられた吸血鬼、レイチエル「アルカードは自分の立場もお構いなしに減らず口を叩く。

助けて損した、とラグナは思った。

「ほ、本気で…」

「死ぬかと思ったツス…！」

周りのレイチエルの使い魔たち、大猫ナゴと赤蝙蝠ギイにはあの広大過ぎる闇は耐えられなかったようだ。

そんなラグナと使い魔たちを差し置いて、レイチエルは少しだけ微笑んだ。

（ラグナ…少しだけ、男の顔になったかしら…？）

「…ハア…。ちっ、まあ良いや。ノエルを追っぜ！」

（……………少し気に入らないけど）

ラグナもそんな少女吸血鬼の想いを他所に、統制機構支部の地下へ体を向ける。しかし、ふとレイチエルに背を向けながらラグナは言った。

「…レイチエル、テルミをぶっ飛ばしてきた」

それはする義務も義理も無い事後報告だった。

レイチエルは少し驚いたように、しかしやはりというように目を細める。

「…そう、ご苦労様」

「俺は……、いや、やっぱなんでもねえ」

言いかけて、強引に話を切る。今ここで言うことではないということなのだろうか。

彼のみぞ知る話だが、普段ならそんな自分勝手さにお仕置きをするレイチエルも、流石に空気を読んだようだ。

気分を切り替えるように、レイチエルも言う。

「ラグナ？」

「あ？」

「頑張りなさい」

「言われるまでもねえよ、ウサギ」

その言葉を最後に、ラグナたちは地下へと足を運んで行った。

ジン＝キサラギ

自身の意志で動く8本のブレード。いつでも生み出せる光の小さな砲台。それら全てを駆使して、ミューはハクメンに斬り込んで行く。

対するハクメンもミューに劣ってはいなかった。とある事情により、本来の2、3割程度の力しか発揮できないハクメンだが、その力は健在。ミューの技を見切り、受け流したり打ち消したりを繰り返す。

ハクメンの持つ事象兵器、^{アークエネミー}斬魔・^{ざんま}鳴神はハクメンの持つ長刀である。その刀身は特殊な金属で出来ており、術式や魔素を絡めた攻撃を無効化し、時をも斬る力を持つ。この力でミューの攻撃に対抗しているのだ。

だが戦況はハクメンが劣勢だった。相手は真の”蒼”を継承したクサナギ。神を殺すために作られたその力は伊達ではなく、受け流しきれない攻撃を繰り返してくる。

「ツルギ」

「ふんっ！」

ミューの手から生み出される光の砲台、「シュタインズ・ガンナー」。しかし光を放つ前にハクメンはシュタインズ・ガンナーを斬り捨てて。すると鳴神の能力が発動し、術式を無効化する「封魔陣」^{ふうまじん}が展開される。

それを視認するミューは跳び上がり、ブレードで直接ハクメンに攻撃するつもりだ。

(ふ…クサナギとはいえやはり幼い少女か…)

魔力をため、ハクメンも跳び上がって迎撃する。

ハクメンの体はスサノヲユニットと呼ばれる特殊な鎧。魔力を勾玉という特殊なゲージに押し込めることで、より強力な力を引き出せる。本来のスサノヲユニットの力は知るよしも無いが…。

「ほたる火蛸！！」

左足の対空ハイキック。単純な技だがこれだけで常人なら砕け散る力だ。

対するミューはブレードを突然仕舞った。

「！？」

「アメノハバヤ」

代わりに飛んできたのは発光する巨大な光球。突き出されたハクメンの左足を焼き千切らんばかりにそれは衝突した。

ハクメンはもろに光球を受け、地面に倒れる。

着地したミューは両手の平を地面につける。

すると見えない衝撃波が連鎖し、ハクメンの体を奥へ奥へと運んでいく。最終的に衝撃波は大爆発を起こし、ミューの眼前には攻撃の跡しか残らなかった。

爆風を無表情で受けながら、ミューはハクメンの様子を伺った。

「さすがはクサナギか…」

「対象の戦闘力、やや低下を確認」

ハクメンは痛みをこらえながら、鳴神を構えなおす。ダメージは決して低くない。

「…なるほど、なかなか手強いな…」

対するミューも少々ではあるが傷を負っている。しかし、戦闘開始時とほぼ同一の表情を決して崩しはしなかった。

「破損微細、戦闘続行します」

「くっ…！」

その時、

「！」

「事象兵器を探知」

カツン…カツン…

暗く、窯の光でしか照らし出されない空間に、乾いた足音が響く。やがて足音はハクメンを追い抜き、ミューの眼前へと姿を現す。

金髪のスレートヘアに整った顔立ち。そして翡翠の両目。統制機構で佐官クラスにのみ許される制服を身に纏ったその男の名は「ジン・キサラギ」。かつて「第二次魔導大戦」と呼ばれた「イカルガ内戦」にて多大な武功を立て、今はミューとなったノエルの上官に当たる、統制機構術式部隊第三師団師団長を務めている。そして、世界最強の反逆者ラグナの実の弟だ。

「貴様…ノエル・ヴァーミリオンか？」

ジンはミューを見据えながら言った。
ガシャン、と、ジンの後ろで物音が聞こえた。ハクメンが立ち、
ジンの背中を見る。

「ジン…キサラギか…。何をしにきた？」

「邪魔だ、退け」

ハクメンの疑問に答えず、返された言葉はぞんざいなものだった。
ジンとて六英雄の一人であるハクメンを知らないわけではなかった。
むしろ士官学校で嫌というほど習った存在だ。だがジンは尊敬の念
を抱くどころか、嫌悪するような態度を取っている。

ハクメンは「イカルガの英雄」と呼ばれる男の不遜な態度にイラ
ついたのか、声色を低くする。

「何？」

ジンはそんなハクメンに怖気づかず、不遜な態度を崩さず言った。

「聞こえなかったか？邪魔だから退けと言ったんだ」

「アレと戦うつもりか？…貴様の手に負える相手ではないぞ」

「これは”僕達の”戦いだ…。過去の亡霊が、出しゃばるな！！」

今までジンはラグナしか狙ってこなかった。実の兄を歪んだ視線
と使命感で見続け、猟奇的な態度をとってきた。ハクメンはそれを
嫌というほど見てきた。否、見てきたというより感じてきたと言っ
たほうが正しいのかもしれない。

だが今のジンは違った。ハクメンからは背中しか見えないが、目の前にたつ「ジン」キサラギ」という男からは、確固とした意思と力を感じる。それは今まで、事象兵器に振り回されていたジンとは明らかに違ったものだった。

ハクメンは、そんなジンを少しだけ”見直す”ことにした。鳴神を仕舞い、両腕を組んで佇む。

「…謂うようになったものだな。良いだろう、好きにしろ」

「…ユキアネサ、召喚」

六英雄の一人に認めてもらったにも構わず、ジンは右手を差し出す。地面から凄まじい冷気がほとばしり、一瞬のうちに氷塊が現れた。その中にはジンの身長より二回りほど低い刀がある。ジンはその氷をためらいもせず砕き、一回転して刀を手にとつて構えた。

10ある事象兵器の一つ、氷剣・ユキアネサ。ひょうけん幼い頃よりジンが所持する、文字通り氷の刀だ。あらゆる冷気を絡めた現象を操ることが出来、相手を直接凍らせることはもちろん、大気を凍らせて武器を作ること可能だ。元々事象兵器は黒き獣に対抗する為の武器だが、ユキアネサは特に黒き獣に対する憎しみの塊のようなもので、その憎しみによる強烈な精神支配をジンに対して行ってきた。ジンはそのせいでラグナを歪んだ形で尊んできた。

だが、今は違う。

「対象の戦闘レベルを”SS”と認識、最大攻撃態勢維持」

ユニットに身を包んだままのミューがブレードを翼のように広げ、身構える。

自分を支配し続けてきた武器、ユキアネサを今度は自分が完全に支配した今、ジンはもはや何も恐れることは無かった。ただ自分に

課された使命のまま、ユキアネサを構える。

「我は刃^{ジン}…世界に均衡をもたらす者、ヤイバ！」

「…！」

「来い！！！」

世界に”秩序”をもたらすもの。

相対するは世界に”絶望”をもたらすもの。

今、文字通り世界を懸けた戦いが始まる。

ミュー・トゥエルヴ

ジンがミューと相対している頃、ラグナとレイチエルは螺旋階段を駆け足で降りていた。最もレイチエルに関してはナゴに乗せて貰っている状態だが…。

ふと、ラグナがレイチエルに尋ねた。

「んで…あのバカ助けるにはどうすりゃ良い？」

それは、ミューをノエルⅡヴァーミリオンに戻すための手段だった。ノエルは自覚はしていなかったがムラクモだ。そこからクサナギになったというならば、戻す方法もきつとあるはずだ。

だがレイチエルから返ってきた言葉はラグナを絶句させた。

「…残念だけど、ああなってしまうては手の施しようが無いわ」

「なっ…！」

「ノエルは”蒼”を継承し、その力でクサナギになっている。貴男にも意味が分かるでしょう？彼女にはあらゆる事象干渉は勿論、それを外部から制御する術は無いの。最も、あの男ならどうにかなったでしょうけど…」

あの男とは、言わずとも分かるだろう。

結局のところ、ノエルは自力でクサナギになったようなものだ。 ”蒼”の継承者はあらゆる生命への事象干渉や、真実を観測する力を持つ。しかも、”神”と呼ばれるほどのマスターユニットを破壊出来るほどだ。元々そのために造られたものでもある。だから”精

鍊”されてしまったミューに今更干涉できる術は存在しない。レイチエルはそう言っている。

ラグナは齒軋りするが、レイチエルに対する反論材料は無かった。

「…殺すしか、ねえってか…」

「最悪の事態になる前に、ね。貴男の蒼の魔導書なら、それが可能はず…」

ラグナは自分の右腕である蒼の魔導書を見る。
ブレイフル

そこに追い討ちをかけるように、レイチエルは言った。

「それが、多分あの子を”救う”唯一の方法よ」

走っている螺旋階段は、まだもう少しだけ続いていた。
ラグナの絶望感を表現するかのように、薄暗く。

「凍れ！」

地にユキアネサを突き刺し、氷剣の像をミューにぶつける。
しかしミューは氷像を見向きもせずブレードで碎き、シユタイン

ズ・ガンナーを二つ打ち上げる。

「愚か」

光の砲台から二閃、光弾が射出される。

ジンはギリギリで魔素による障壁を張る。

数秒後、遠距離戦では埒が開かないと思ったのか、氷で作った杭を飛ばし、それに自分も乗る。

「霧槍・突晶撃！！」
むぎづつ とうしゅうげき

一気に距離をつめ、ユキアネサを横に振る。

ミューはブレードで防御。少し押されて後ろへ後ずさる。

（ここだ！）

ジンは後ずさったミューに隙を見出す。収束していたブレードを広げる瞬間、その刹那に冷気で巨大な矢を作り出す。隙間を縫うように、氷河の矢はミューを貫く。

「氷翼月鳴！！！」
ひよくげつめい

極限に押し固められた冷気を押し付けられたミューは一瞬で氷付けになった。

ミューが入れられた氷像を前に、ジンは呼吸を整える。

「ハア…ハア……………」

だがそれも長く続かなかった。

ビキッ

「…!?!」

「ツヌゲイ」

バキヤアアッ!!

氷は砕け散った。その跡に立つのは、自らの身を守るようにブレードで自身を囲うミュー。

「ば…」

馬鹿な、そう言おうとした次の瞬間には、ジンはミューの拘束術式で身動きが取れなくなっていた。

ミューはジンの頭上でブレードを扇の様に展開し、魔力をこめる。

「オモヒカネ」

8つのブレードが光り輝き、ジンに襲い掛かる。

ジンは成す術がなかった。自らに降りかかる攻撃をまともに受け、大量の血を流す以外は。

「グハアアッ…!!」

ミューはジンの強烈な消耗を前に、動きを停止させる。

一方ジンは倒れそうな体を必死にユキアネサで支えていた。

(これが…これが本当にあの鈍くさいノエル＝ヴァーミリオンか…!?!)

「ッ…！なるほどな…確かに手強い…ッ！」

もはや見る影も無くなった部下の姿。

後ろではハクメンが黙って戦いを見ていた。

「……………」

おそらく前のジンでは十秒も保ったかどうか。ハクメンは内心少し感心していた。だが同時にこのままでは確実に死を迎えるだろうということも理解していた。

だがジンはまだ諦めていなかった。

その様子を”観測”したのか、ミューは無機質に、無情に言った。

「戦闘続行」

ブレードが二閃、三閃とジンを引き裂く。

「ガハッ…！」

「やはり無理か」

ハクメンは見ていらなくなったのか、再び戦場へ足を運ぼうとする。

だがそのハクメンを止めたのは、他ならぬジンだった。後ろを振り返ることなく、ハクメンに向かって吼える。

「手を出すな…！言ったはずだ、これは「僕達の」戦いだ…！」

「世迷言を。言ったはずだ、貴様の手に負える相手ではない、と」

「まだだ…！…まだだ…！」

足と腰に力を入れ、ユキアネサを地面から抜く。

ミューはブレードを光で繋ぎ、一房の光の刃にするとジンに一闪する。

ズバァッ…！

「グアァァッ…！」

「無駄」

止めと言わんばかりに、手刀でジンの心臓を狙う。

（僕は…届かないのか…。…今回も…！！）

その様子を見ていたハクメンも流石に動いた。だがこの距離では間に合わない。

その時、赤い影がハクメンの前を高速で横切った。

「！」

ガシッ！

「！？」

「……………っ」

「…っ」と

「…遅いよ…兄さん…」

手刀を受け止め、気が抜けて倒れそうになったジンを支えたのは…
…実の兄、ラグナ「ザ」ブラッドエッジだった。

遅れて、ハクメンの後ろから誰かが歩いてやってきた。

「…道化」

レイチエルは息切れしている使い魔に目も向けずに、ラグナとジン、二人の兄弟を見つめていた。

ラグナはジンに視線を向けると、意地悪な笑みを浮かべる。

「…あ？ああ、テメエがやられるのを物陰で待ってたんだよ」

「…ハハ」

ジンはラグナが嘘をついていると一瞬で見抜いた。これも兄弟がなせる技なのか。

「…ま、良いや。テメエは下がってろ」

「よろしくね、英雄さん」

ふとレイチエルが口を挟んだ。どうやらハクメンにジンを任せつつもらしい。

本人である白い英雄は正直嫌だった。嫌だったが…。

「……………これも、何かしらの宿命か…」

あっさりとラグナからジンを受け取った。

ジンと同じく、ラグナから何かを感じ取ったのだ。

二人の兄弟が、この確率事象^{「ランディニウムシフト」}で生み出した変化。これが、レイチエルの言っていた”期待”なのだろうか。

「…さて、と」

ハクメンに弟を託した死神は、掴んだままの右手を…ミューを見据える。

ミューは掴まれた手を強引に引き、ラグナと距離をとる。

この時、紛れも無い二人の”世界の破壊者”が対峙した。

ノエルⅡヴァーミリオン

ミューは観測を開始した、目の前にいる男を。

ラグナⅡザⅡブラッドエッジ。

史上最高額の賞金首にして、SS級の統制機構反逆者。
不完全なムラクモ精錬の窯、プレイフル蒼の魔導書を所持する。

そこまで観測すると、ふと、脳裏に砂嵐と共にある少年の顔が浮かんできた。

ミューはそれを無視しようとした。だが出来なかった。
思考回路にバグが生じているらしい。

観測結果を口に出して、バグを修正することにする。

「対象、プレイフル蒼の魔導書を所」

「おいノエル！このバカが！！」

「！！」

しかし修正はかなわなかった。

ラグナⅡザⅡブラッドエッジが妙なことを口走ったのだ。

ノエル？違う、私はクサナギ。

「まったく、そんなわけのわかんねえもんに成り下がりがあって！」

私はクサナギ。

それ以外の何者でもない。

「クサナギ？神殺しの剣？ざけんなよコラ！テメエは、ノエル」ヴ
アーミリオン以外の何者でもねえだろうが！！」

何を言っているのだろうか。

クサナギ。

神殺しの剣。

それこそ私の全て。

分からない。

「対象、精神波長、不明、不明、不明、不明」

「お前、俺と話がしてえとか言ってたよな？」

『別に、なんでもないんです。ただ、少しお話しようかな、って思
ってただけで』

「！？」

ラグナ「ザ」ブラッドエッジが再び妙なことを言う。

記憶が流れ込んでくる。

なんなのだろう。

私は”ノエル”ではないのに。

「あん時は悪かったな、ちとイラついててよ…。でももう大丈夫だ。
分かった、話ぐらいはしてやる」

何故謝るの？

何故話をする等と言うの？

何故…何故…

何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故…

ふと、何かを感じた。
なんだろう、この暖かい…懐かしい感覚は…。

「対象内に未確認エネルギー確認」

「ただし、その前にそのクソ下らねえ鎧ぶつ壊してからだ！」

「対象に戦闘の意思を確認。戦闘態勢に入ります」

「かかってきやがれ！この大バカ野郎が！！」

先に仕掛けたのはラグナだった。愛用の大剣を横に一閃抜き放つ。ミューはジャンプしてかわす。そのまま太陽のような球状の光をラグナに向けて放った。

「アマノハバヤ」

バックステップして光を避ける。
続いてシュタインズ・ガンナー。光の砲台が次々と襲い掛かる。

「甘えよ！」

障壁を張り、防御。一通り弾幕を防ぐとすかさず障壁を解き、拳を突き出して突進する。

「ヘルズ・・・！」

「無駄」

ブレードで防がれるが、構わず地獄の顎で噛み砕こうと右腕を振り上げる。

「フアングー！」

少し押し出されるがミューは態勢を崩さない。攻撃を防がれた分、ラグナに隙が出来てしまう。

ミューは当然その隙を逃さない。8本のブレードを突き出す…と、その時空間に穴がぽっかりと開く。

「！？」

一瞬その様子に呆けるラグナ。レイチエルが魔法で援護してくれたわけじゃない。むしろレイチエルは傍観を決め込んでラグナに託したのだ。クサナギであるノエルの行く末を。

だが次の瞬間、ラグナの目の前にも空間の穴が開き、そこからブレードが飛び出してきた。

驚愕した分防御が遅れ、吹き飛ばされるラグナ。

「グアッー！！」

後方に大きく飛ばされたラグナ。

「に……兄さん……！」

ジンはハクメンに支えられながらその様子を見ていた。

ハクメンもまた、不本意ながらジンを支えながら見ていた。

「……………」

しかしラグナは当然この程度で死にはしない。

周りの瓦礫を押し退け、ゆっくりと立ち上がる。

だが先ほど様子が違う。右腕から生命力を吸い取る闇のオーラが噴き出し、ラグナの体を覆っている。いつの間にか蒼の魔導書^{ブレイブルー}を起動していたようだ。

「ちっ……。ノエルの癖に生意気なんだよ！」

「……！」

さっきの一撃を喰らったことにムツとイラついたのか、不機嫌な顔をしながら駆け出す。

ミューは若干混乱していた。

何故”そんな顔”が出来る？

「オラアッ！」

右回し蹴り。

防御。

大剣で一閃。

防御。

「ツヌグイ！」

ブレードで周囲を覆い、結界を張る。その際の衝撃を喰らい、ラグナが再び吹き飛ぶ。

だがラグナは立ち上がった。さっきの不機嫌そうな顔を止め、少し楽しそうに笑っている。

「ハッ…やるじゃねえか」

「…！？」

ミューは再び困惑する。

何故また”そんな顔”が出来る？

ラグナの表情に、ミューに対する敵意が…殺意が無かった。むしろこの戦いを戦いと思っていないような…。

そう…まるで…

「…っ、ヤタノカガミ…！」

思考を振り払い、背から巨大な光をいくつもシュタインズ・ガンナーに向けて発射する。

光を受けたシュタインズ・ガンナーは、まるでそれを反射するかのようにラグナに向けて照準を定めて撃つ。

「…！」

流石に焦りを見せたラグナ。そこかしこに配置されたシュタインズ・ガンナーから放たれる光をかわし、ミューに接近戦を再び挑む。

「だがミューもバカではない。飛び込んできたラグナに対し、ミューは、

「崩壊！」

ゴバツ！

砲台を自爆させた。

「！！！？」

突然の行動に対処が利かなかった。

爆発に巻き込まれ、ラグナの姿が土煙で見えなくなる。

レイチエルはそんな光景を眉をひそめ、目を細めて眺めていた。

「……………ラグナ……………」

「兄さん……………」

「…黒き者……………」

「カーネージ……………」

「！！！？」

土煙からラグナが飛び出す。爆発の余波をともに食らったのか、頭や体のところどころから血を流している。

だがそんな傷に構わず、ラグナは大剣を構えて突っ込んでいく。そして一回転、溜め込まれた闇の波動が、虐殺の刃となって交差する。

「シザァー!!」

ミューは予想外の行動に防御が間に合わず、刃に飲まれた。回転しながら今度はミューが吹き飛んでいく。

「うあああつ!!」

ドシャ…!

ノーバウンドで地面に落下し、刃に付けられた傷が更に開く。起き上がったミューは自分の体を抱きしめ、両膝を突く。

傷はすぐに塞がっていった。”蒼”の継承者であるミューは、生命の源である”蒼”の恩恵を受けられる。だが、ミューは立ち上がらなかった。否、立ち上がれなかった。

「……………」

「……………」

「私…私…私は…、憎い憎い憎い…!!」

「……………!!」

ようやく口から出た言葉は、「憎い」、その一言だった。

ミューは…というより、ミューを含めた次元接触用素体は境界にあるものを調べるためにさまざまな実験を受けてきた。もちろん激痛を含んだ。

”蒼”を継承したノエルはそれら全てを”観測”してしまったの

だ。

世界の真実を。

人の真実を。

全ての憎悪、悲しみ、苦しみを。

そして生まれた感情が…「憎しみ」と「破壊」。

「世界が…私を、憎む…！」

ミューの表情が次第に変化していった。眉間にしわを寄せ、弱々しい表情へと。

「私は、私は、私は人間じゃない…！人形！人形…憎い…憎い憎い憎い憎い…！」

「うるっせえんだよ…！人間じゃねえ？それがどうしたってんだ…！」

ラグナがそんな弱々しくなったミューに向かって吼える。

「俺だつて造られた体だ！魂だつて誰のモンだか分かんねえ！でもな…それでも俺は人だ、人間だ…！」

「ウウツ…ウウウウウ…！」

その会話を聞いていたレイチエルが苦悶の表情を浮かべる。
やはり無理なのか。

「…クツ…！」

ラグナも齒軋りする。

本当に救う手立ては無いのか。

もうノエルはノエルではないのか。

世界を壊すまで…解き放たれることは無いのか。

「……………、…？」

その時、ふと右腕の蒼フレイブルの魔導書が目に見え飛び込んできた。

そういえば、レイチエルとテルミはなんと言っていた？

『蒼フレイブルの魔導書本来の形は窯なんだよ』

『もうあの子は精錬されてしまっているのよ』

『だがな、コイツは違う…。真の”蒼”を内包した素体だ！』

窯。

精錬。

そして、”蒼”。

「……………！」

ならば。

クサナギの精錬に、”蒼”の力が要するというのなら。
その力を汲み取ってしまえば。

「……………ブラック・オンスロット！！」

「……………ラグナ！！」

レイチエルはラグナに同情の視線を送ろうとした。しかし、ラグナはまだ諦めた目はしていなかった。

ラグナは右腕から噴き出す闇を大剣に送り込む。すると大剣の柄が伸び、刃が直角に曲がって、まるで大鎌のように姿を変える。

獣兵衛からこの赤いジャケットと共に送られた大剣、ブラッドサイス。

「ブラック・ザガム!!」

姿を変えた大鎌を構え、ラグナが叫ぶ。

「おいノエル!!」

「……………!!」

「少し痛えかも知れねえけど勘弁しろよな!!」

ラグナの、正真正銘最後の賭けが行われる。

蒼

蒼フレイブルーの魔導書によってもたらされた魔力を剣に注ぎ、大鎌に姿を変えさせるラグナ。大鎌を振り上げ、ミューに向かって振り下ろす。
しかし、

「…何故…」

ガオン！！

大鎌が受け止められた。

一体何が…。と、ラグナはミューの方向を向く。

するとそこには、一本の巨大な剣が、空間から現れた巨大な手に握られ振るわれていた。その手からすれば握られた剣は短剣のようなものだ。だが一般人からすれば、普通の大剣より…少なくともラグナの大剣の20倍は大きい。

クサナギが振るう、真正正銘の「カミゴロシノツルギ」。

「貴方達の住む世界は…」

カミゴロシノツルギは大鎌であるブラッドサイズを弾き、ラグナの真つ二つにしようと振り下ろされる。

だがラグナも負けじとブラッドサイズを振るい、カミゴロシノツルギを弾いて見せた。

「苦しみと悲しみに満たされ、絶望をただ繰り返す…」

「…！く…！」

そしてブラッドサイズとカミゴロシノツルギによる弾き合いが始まった。

そんなスケールの大き過ぎる戦いをレイチエルは黙って見ていた。

「……………」

金属がぶつかる悲鳴がこの空間一体に響き渡る。
ふと、ハクメンが漏らした。

「…フツ。ああして見れば、確かに彼奴は「死神」だな…」

「…兄さん…」

ジンもハクメンに支えられながら見ていた。

” 自分達の ” 戦いを。

金属の悲鳴はまだ鳴り止まない。

「うおおおお！！！！」

ガギン！！

ガギン！！

ガギン！！！！

お互いの得物を振り払う戦い。

しかし、とうとうカミゴロシノツルギが痺れを切らす。

「…そんな世界…要らない！！！！」

ミューの咆哮と同時にカミゴロシノツルギが金色に輝き、向かってくるブラッドサイズをラグナの手から引き剥がした。

「!!」

宙に飛ばされたブラッドサイズは魔力の供給が切れ、元の大剣に戻ってしまふ。

一方、力尽きたカミゴロシノツルギも、巨大な剣と一緒に異空間へと消えていった。

だが、

「っ!!」

ブラッドサイズを弾かれ、丸腰になったラグナが一気に駆ける。

ラグナは始めからブラッドサイズでミューを仕留める気は無かった。こちらがスケールの大きい技を繰り出せば、向こうも同じように迎撃する。そうすれば、決着がついた後に自分が動けば、今まで武器に氣を取られていた向こうにラグが生じる。

もしそうでなかった場合はどうしていたのだろうか。本当に計画性の無い男である。

だが現実、ラグナは呆氣に取られたミューの懐に入ることに成功した。

「イデア機関接続反転!!」

「えっ？」

ラグナの思わぬ発言に、思わずレイチエルが呆氣に取られる。

ラグナは”左腕”でミューの頭をわし掴む。ミューは抵抗しようとしたが、

「目え覚ましやがれ!!!このバカが!!!」

ラグナの叫びに怯み、隙を作ってしまう。

凄まじい魔力が生じ、ラグナの左腕がミューから何かを奪い取っていく。

だが左腕が耐え切れていない。みるみるひび割れていく。

しかしそれと同時に、ミューのクサナギの鎧もまた碎け散っていく。

やがてラグナの左腕と共に鎧は完全にはがれ、一瞬発光したかと思うとノエルⅡヴァーミリオンは元の白い装束を纏って意識を失った。

「…うつっ…うつん…」

「…ったく…手間かけさせやがって…。…本当、このバカが…」

ラグナもまた、左腕を失い傷だらけの体を倒して気絶した。

タカマガハラ

無とは、どんな色をしているのだろうか。

世界の始まりであるビッグバンとは、“無”と呼ばれる空間から自然発生したものだという。

だがその無という世界では何の概念も存在しない。

生命も。魂も。意思も。色も。

そう、何も存在しない。

ここはまさにそんな無を表現した空間なのだろうか。

真っ白な部屋に、三つの椅子が中心を向いて円を作っている。何処から降り注ぐ光が椅子の影を作っているが、影は椅子だけではなかった。確かに椅子には誰も座っていないのに、人の形をした影がある。

一つの影が言った。

「ラグナ「ザ」ブラッドエッジが”眼”を倒すとはな」

重く、発言力のある低い男の声だった。

それに対し言葉を返したのは、ノリの軽そうな若い青年の声だ。

「ああ、とても面白い事象だったね。あの”蛇”まで倒したんだからね。レイチエル「アルカード」が目をかけただけの事はある…というわけだ。確かにあの男の価値は、再検討が必要かもしれない」

「イエス

コンティニウムシフト

この事象も、確立事象の可能性の一つとして記録しておきます」

更に声を上げたのは女性のもだった。淡々とした、必要最低限の音量と声色しか発しない、まるでマニュアルを見ながら喋っているかのようだ。

彼らは人から”タカマガハラ”と呼ばれている。かつて太陽の神が治めたといわれる世界の名だ。彼らは人が住まう世界より離れた視点から、人の世界の事象を記録し、観測している。人が作った”事象管理システム”だ。タカマガハラには三つの思考が存在する。先ほどの低い男の声が「TA（”T”はタカマガハラの略なのか）」、青年の声が「TB」、女性の声が「TC」…ということになっているが、その各思考パターンに名前は一切存在しない。彼ら三つがタカマガハラなのだから。

TAが続けて言った。

「だが…これは我々の望む未来ではない」

「イエス

この事象では、「滅日」ほろびへのプロセスに支障を来たします」

TCもTAの発言に同意した。

タカマガハラには目的があつた。自分達の管理する世界はより完璧で、完成された世界でなくてはならない。そしてそんな世界を自分達がより完璧に管理するべきだ。その意志の下にタカマガハラは確立事象を引き起こしたり、2199年12月31日から100年前にループさせたりしている。

「滅日^{ほろび}」とはなんなのか、それはレイチエルにも想像がつかないが、確実に今ある世界を変えてしまう出来事に違いない。

そんなタカマガハラ的思考パターン、Bが言った。

「でも結果的に良かったと思うよ？ノエルⅡヴァーミリオンが”眼”の力を失ってくれば、僕達が晴れて”蒼”を継承できる。マスターユニットの破壊は失敗してしまったけどね」

T Bの発言に再びT Cが賛同した。

「イエス

ノエルⅡヴァーミリオンは不確定因子です」

「”蒼”さえあれば後は我々でどうにかなる。この可能性のみを摘出し、我々が”蒼”を継承することにしよう」

「でも、その前に…」

「特異点^{とくいてん}の排除が必要になるな。奴はマスターユニット破壊に失敗した時点で用済みだ」

ノエルは次元接触用素体の12番目にあたるムラクモだ。しかしノエルを作っていた統制機構の支部は、^{アークエネミー}事象兵器の一つ、^{ハンダー}巨人・タケミカツチによって破壊されている。ノエルはそこで死亡していなければならなかった。

だがどういうわけか、ノエルは生き残った。そしてレイチエルにも、タカマガハラにもノエルの生存は予測できなかった。これが何を意味しているのかは分からない。

タカマガハラが意見をまとめた所で、TCが言った。

「イエス

では、ユウキィテルミに対し、「初期化」を開始します」

そしてタカマガハラが行動を起こそうとしたその時だった。

「…なんだよ、クソ寂れたところじゃねえか。こりゃ客用の茶は期待できねえかな？」

「！」

突然だった。前触れは無かった。彼らが円を作っているその中心に、ソレは居た。

胴体は大きくひび割れ、どうにか人型を作っているような緑色の影。頭の口は横三日月型に真っ赤に裂け、左目にあたる部分はポツカリと薄緑色の穴が開いている。第一印象を言うなら、「気持ち悪い」。

ソレの名は、ソレの正体こそが、「ユウキィテルミ」本体だ。ハザマと名乗るその肉体は仮の寄り代に過ぎない。

まるで、「噂をすれば影」を体現した形で現れたテルミは両腕を何かを受け止めるように広げ、タカマガハラの中央に立っている。イメージするなら、審問されている罪人と言ったところか。

「おいおい、せっかく遊びに来たんだぜ？茶はともかく椅子の一つでも用意しといてくれや」

「貴様…何故、どうやって”ココ”に侵入した？」

TAが問い詰める。発言力のある低い声は、珍しく動揺していた。その動揺はTBにもあった。警戒するように声を震わせている。

「有り得ないよ。僕達に認識されずに入るなんて」

「ノー」

全ての可能性を検索しても、侵入に関する履歴がありません」

TCが報告する。まんまと侵入されておきながら一切の動揺を見せない。まるで、自分は記録と行動のみを司っているとでも言うように。

タカマガハラは動揺に少し満悦したのか、大きく裂けた口を更に広げながらテルミは言った。

「いやー、ラグナ君は本当に…本つつつ当に俺様の役に立ってくれるよ。こりゃマジで感謝しとかねえとなあ？ヒヤッハハハハハハ！」

タカマガハラは事象管理システム。人間の住まう世界から侵入される時を見逃すはずは絶対がない。だがテルミは侵入した。それもタカマガハラに一切勘付かれずに。

テルミは混乱している思考パターンに説明するように言葉を続けた。

「テメエらが観測した可能性の中でこの事象のみ、ほんの一瞬、その数ナノ秒間……テメエらは”余所見”をしたはずだ」

TCは確認を取るように履歴を検索した。

「イエス」

タカマガハラの全システムは、ラグナ・ザ・ブラッドエッジがノエル・ヴァーミリオンを倒した48万分の1秒間、この事象のみを観測しています」

TAは反論した。

「そんなものは修正範囲内だ」

コンティニューソフト

確立事象。それは起こりうる全ての可能性の実現。それをもつてしてもラグナがクサナギを倒すことがそれほど驚愕に値することなのだろうか。

テルミは更に反論した。

「あれ？言ってなかったっけか。俺様は全ての可能性を「観測^み」たんだぜ？」

「ノー」

人では予測不可能です」

本来ならラグナたちのように”舞台”に飲まれてしまう。だがテルミはそんな舞台すら自分は観客と役者を同時にこなしたというのだろうか。

テルミは嬉々と言う。

「テメエらが選んだ「初期化」がまずかったな？いやあー、「魔法」って素晴らしいねえ！！」

「…我々の理解を超えている」

絶望したかのように、TAの低い声が更に低くなっていた。

追い討ちをかけるように、周囲の椅子を見回しながらテルミは続けた。

「さてと。「滅日」^{ほうび}は俺様のほうでしつかりと進めといてやるからさ、テメエらはお役御免だ」

「ノエルⅡヴァーミリオンが”眼”の力を失っている以上、我々を失うとお前は存在できないぞ」

TAが脅すように言った。

本来テルミはある事情で境界に閉じ込められていたのだ。だが「滅日」^{ほうび}のためにと、タカマガハラ^{タカマガハラ}の干渉によりテルミは現世に出られるようになっていたのだ。しかし出られるといってもわずかの間、それを確定させるためにテルミは暗躍して、“蒼”の継承者であるノエルに自身を観測させ、干渉させたのだ。それが消えてなくなつた今、テルミの存在を支えるものは無い。

だがテルミにはそんな脅しすら通用しなかった。

「ご忠告どうも。でも大丈夫、テメエらが心配することじゃねえから」

ふと、TCが現世に出現した新しい”何か”を観測した。

「イエス

事象内に、新たな特異点が発生しました」

「まさか君は……”彼女”を起こしたのかい？」

T Bの問いに、気持ちの悪いウネウネした手で拍手して応えるテルミ。

「ピンポンピンポンピンポーン、だーいせーいかいー！！賞品はー、ファントム特製の「ウイルス」ですー！！」

拍手を止めず、他者の不幸を祝う影。

タカマガハラは動こうとした。しかし、時既に遅し。テルミは既にタカマガハラにウイルスを注入していた。

「デメエらにとっちゃ未知の数式がビツツツチリ仕込んでいるから……永遠にそれでも解いてるや」

「イエス

危険です、危険です、危険です」

「んじゃ、おつかれちゃーん」

永遠のお別れに手を振るテルミ。

TAとTBの声が聞こえなくなった。警告を訴えるTCの声も、最後の最後まで焦燥も絶望感も感じさせず、消えていった。

同時に、周囲の椅子の影に座っていた人型の影も、一瞬砂嵐が走ったかと思うと消えていった。

そして彼らが鎮座していた椅子も、文字通り影も形も薄れ、消えていった。

「クククク…。…ヒヤヒヤヒヤ…ヒヒヒッ！ヒヤッハハハハ！ヒヒヒヤヒヤヒヤ！…ヒヤヒヤヒヤッハハハハハハ！…！」

真っ白になった空間に、テルミの笑い声が響く。

「さあ…マスターユニット、アマテラス…あとは、テメエだけだぜえ…！」

確率事象（コンティニューアムシフト）

統制機構カグツチ支部。その最下層にて、一つの戦いが終わった。辺りは瓦礫の山。所々に血のシミや、床が抉られ、切り刻まれた跡が鮮明に残っている。

だがこれらの被害で済んだことはむしろ奇跡と言って良い。ここで今まで戦っていたのは、文字通り世界を破壊しかねない強大無比な存在だったのだから。

そんな存在を止めたのは、皮肉にも”世界の破壊者”という役割を与えられた者など、誰が想像がついただろう。

勇敢な戦士ではない。

まして選ばれた英雄でもない。

”世界の破壊者”というウイルスに対抗する”抗体”でもそれは叶わなかった。

ただ一人、ぶっきらぼうでお人好しで、意外と料理上手で幽霊が大嫌いで、「シスコン」の汚名を着せられていたかも知れない男。

ラグナは傷だらけで左腕を失った体を、意識を取り戻したノエルに預けていた。

ノエルは泣きじゃくっていた。ラグナの体を受け止めながら涙を流し、大声で泣いていた。正直淑女とは程遠い状態だ。

「でも！でも！どうして…！何で私なんかのために！どうして！？」

「…痛っ…。…あんま、デカイ声出すんじゃないやねえよ…傷に響く…」

「だってラグナさん！！腕が、腕が…！」

ノエルは、肘から先が存在しない左腕に手を置きながら言った。

何故自分をここまでして助けたのか。こんなになってまで助ける価値など自分にはないのに。

怒りと憎悪の鎖から解き放たれたノエルが真っ先に感じたことだった。

ラグナは特に問題無さそうな調子で返す。

「ああ？…ああ、無くなっちゃったな…。まあでも、もう一本あるし、大丈夫なんじゃねえか？…」

既に切り落とされた自分の右腕。更に失ってしまった左腕。両腕とも自分のものが存在しなくなったが、後悔は無かった。理由など無い。もしかしたらただの気まぐれかもしれないし、ノエルが妹と瓜二つだったからかもしれない。

でも、例え腕どころか足が消し飛ばうが心臓が無くなるうがラグナはノエルを救っただろう。

それが、ラグナ「ザ」ブラッドエッジという”人間”なのだから。

「そういう問題じゃないんです！！無いんですよ！！」

「…うつせえな…良いじゃねえか、本人が問題なしって言うてんだから…」

「わあああああ！！バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカあああ！！！！」

「また…バカって言いやがって…！…っつー…」

「バカ……………」

「…無事で…何よりだ、ノエル…」

会話が一度途切れ、そこに割って入ってきた者がいた。レイチエルだ。

ラグナは知るよしも無いが、彼女も泣きそうになっている。まあプライドの高いレイチエルは、意地でも泣きそうな顔をしていた等と言わないだろうが。

「…精錬を逆流させるなんて…。貴方は本当に…バカで、バカで…愚鈍なお人よしだわ…」

フレイブル

蒼の魔導書は、境界にあるシエオルの門に接続して蒼の力を汲み取って使役するもの。それを反転起動させ、外部にあったノエルの持つ蒼を吸収し、クサナギに絶対不可欠な要素を消去することで強引に元のムラクモに戻した。それがラグナのやったことだった。

普通の人間の体では絶対にもたない。実際ラグナの左腕の犠牲があつて達成したことだ。

レイチエルの言葉を聞き、ため息をつく。今度はハクメンが近寄ってきた。

「…フッフ…」

「英雄さん？」

「ここまで手負いのものを滅する気は起きんな。…道化よ、私はもう行く」

心なしか、白い英雄は笑っていた。それは果たして、ノエルを救うという業を達成したラグナに対する期待の笑みか、それとも別の思いがあったのか。

ハクメンはラグナ達に背を向け、昇降機に足を運ぶ。
ラグナはハクメンの行動に意外さを感じる。

「おい…見逃して…くれんのか…？」

「次だ。次、あいまみ相見える時、それが貴様の終わりだと思え、黒き者よ」

「……………兄さん」

今度はジンがラグナのほうへ歩いてきた。実の兄がボロボロの姿を見て哀れみを感じているのか、悲しそうな表情をしていた。

「出来ればテメエも…今日は、勘弁してくれねえか…？」

「ノエル…ノエル…ヴァーミリオン…！貴様…貴様あ…！」

「！ヒック…キサラギ少佐、今…ラグナさんを…」兄さん」と…
？」

「そんな事はどうでも良い！貴様…貴様は…！」

実の兄をここまで追い込んだ部下への怒りがいよいよ頂点に達していた。部下は未だに泣きそうな顔をしているが。

しかし、ジンがノエルを問い詰めることは出来なかった。

「そうですねえ？どうでも良くありませんよ、皆さん」

慇懃無礼で掴み所の無い口調。諜報部特有の黒い制服と帽子。そこには、ラグナに倒されたはずのハザマがいた。

ラグナは宿敵の前に動こうとするがノエルに体を押さえ込まれる。ノエルはハザマの姿に怯えていた。ハザマはノエルの悲劇の記憶を呼び覚ました張本人だから無理も無いが。

「ノエル、ラグナと一緒に私の後ろへ…！英雄さんたち！」

レイチエルが声を上げるとジンとハクメンがハザマの前に立つ。

「ハザマ大尉！！」

「テルミ、貴様…！」

「あらあら皆さん、揃って怖い顔しちゃって。本当嫌になっちゃいますねえ」

手負いとはいえこれだけの戦力を前にあくまで飄々とした態度を崩さないハザマ。

「というか、皆さんにご報告があるのですよ」

ハザマは押さえつけていた帽子から手を離し、両腕を広げて声を張り上げる。

「実はたった今！タカマガハラを無力化してきちゃいましたー！！」

「なっ…！？」

「馬鹿な！では何故貴様がここに存在る！？」

二人の反応が気に入ったのか、ハザマは更に声を張り上げた。

「全ての事象は”ここ”！ここに集約しました！何もかも全てその、ラグナ君の働きのお陰です！皆さん、この若き功労者に盛大に拍手をー！！」

パチパチパチ

ハザマはわざと大きく一人で拍手をする。

ラグナは、また自分はこの男に踊らされていたのか、と怒りを大きくする。

そんなラグナの様子を見て、ハザマは更にラグナの顔を覗き込む。

「おっと！ラグナ君、ちょっと見ない内に随分とまあイイ男になりましたねえ」

からかっているつもりなのか、ハザマはそのふざけた笑みを決してがさず続ける。

「それにノエル嬢…」

「もう！私は…貴方に言いなりにはなりません…！」

ノエルの強い意思表示。

ハザマは少し残念そうに首を横に振った。

「あらあ振られちゃいましたか。ちょっと寂しいですが、もう私のほうも貴方に用は無いんです。ですから…」

そこまで言うとな意に帽子を脱ぎ、邪悪な笑みを浮かべる。

「もう面倒くせえから！全員まとめておつ死ねやあ！！ヒヤッハハハハ！！」

「この…クソ野郎が…！！」

「やめろ…………ハザマ」

「！！！？」

ハザマの暴拳が全員を襲う瞬間、新たな闇が戦場にやってきた。

帝

統制機構カグツチ支部の最下層。そこに新たな闇が迫っていた。声のする方へ振り向くとそこには顔の鼻から上を金の仮面で隠している男が居た。紫のマントを着て、傍には男より一回り大きい人型の機械のようなものが立っている。

「大方の…目的は達した…退くぞ…」

男は非常にゆったりと喋った。

話しかけられたハザマは仲間であるはずの男に対しても敵意をむき出していた。

「うるせえ変態野郎！邪魔すんならテメエから殺すぞ！！」

「レリウス…レリウス…クローバーか？」

「あの人か！？」

ハクメンの言葉に反応したのはノエルだった。

レリウス「クローバー」。「狂気の人形師」とも呼ばれる統制機構の技術大佐である。その怪しげな雰囲気に対応しいほどのマッドサイエンティストであり、ハザマですら彼の性格や性質をもてあましているという。

隣に従えているのは”デトネーター波動兵器”イグニス。素体となっているのは彼の妻、イグニス「クローバー」だ。

レリウスの言葉に反論したハザマだが、ハザマの行動を阻止しようとしているのは彼だけではなかった。

ハザマの前に二人の女性がいつの間にか立っていた。一人はジン

とノエルも良く知っている人物であった。

「なっ…ツバキ!？」

ツバキ「ヤヨイ。ジンを養子に持つキサラギ家の親戚のような家系、ヤヨイ家の一人娘。ノエルの同期でもあり、現在は統制機構の第零師団に所属している。ツバキはヤヨイ家に封印されていた、黒き獣との大戦にも使用された封印兵装・十六夜を扱って戦っている。しかし、全身をクリーム色の鎧で包んでいるはずのその鎧は今真っ黒に染まっており、青かったツバキの瞳も赤く染まっている。

「ジン兄様…ノエル…」

「…女医さん、アンタもか…!」

「……………」

ラグナはジンとノエルとは別の人物に目を移していた。メガネをかけた抜群のプロポーションをもつ、カグツチで唯一の医者である。彼女の名はライチ「フェイ」リン。統制機構と対立し、科学の普及を謳う「第七機関」と呼ばれる組織に所属していた過去を持ち、行方不明になっていた同期を探してカグツチにやってきていた。「境界」の力に魅せられ、憑かれてしまった同期を救い出すために自らも「境界」に手を出し、強い戦闘能力を有している。

ラグナとはその同期の件で知り合いになり、たびたび世話をしているという間柄だ。

ツバキとライチはハザマの暴拳を阻止せんと、ラグナ達と対立しながらもハザマを抑えている。

「…ハザマ……………帝の御前だ…控えろ…」

レリウスは一瞬背後で何かを感じ取る。

その後ろでは黒い炎のようなものが灯り、それが消えたかと思うと紫色のマントとトンがり帽子を被ったモノが立っていた。

あれは人間なのだろうか？ともあれ人のようなそれは、一瞬ラグナ達の方へ向いたかと思うと横へ向き直る。

ソレの名は「ファントム」。常にハザマを監視する、表情も思考も全く読めない存在だ。どうやらレイチエルと同じように、魔法を行使できるらしい。

魔方阵が妙な高さから現れ、それが下降すると縦向きに光の筒を描く。光の筒は次第に消えていき、その跡から何者かが姿を現した。

「帝…だと…？あの帝が…、！？ なっ、まさか…！」

少女だった。紫宛の髪は頭上で結わえても腰の辺りまである長さ。瞳に光は無く、血のように紅に染まっている。服装に関しては高貴という言葉では足りないほどの出で立ちで、紫をメインカラーにその小さな体をスッポリと隠している。

だが問題なのはそこではなかった。

その少女の、顔だ。

「……………サヤ…！？」

見間違えるはずが無い。長い間衣食住を共にした実の妹の顔を。

忘れるはずが無い。宿敵に連れ去られていった家族の顔を。

長年探してきた。ノエルやニュー、ラムダを見るたびに思い出したその顔こそ、ラグナとジンの実の妹、サヤだった。

「…去ね。テルミ」

サヤ…帝は視線を少し動かしてハザマに向ける。

ハザマはそんな帝の視線を受け、凶悪な表情から元の胡散臭い柔和な表情に戻った。帽子を被り、少し身を引く。

「……………。いやいや私としたことが、少々取り乱してしまいましたね」

場の空気は完全に向こうに支配されていた。

統制機構のトップ。その人が現ただけで圧倒的な存在感が場を掌握していた。普段は人目に付かず、滅多に謁見することも許されない帝が今こうしてここに居るといふのは、それほどの大事なのだ。帝は視線を少し上に動かし、空虚である宙を見据え、両腕を広げて語る。

「タカマガハラは既に余の掌中。ランダムエノメノン”確率事象”は今、シークエンスヨナルン”確立事象”へと”シフト”した」

誰もがその言葉を聞き入っていた。

否、聞き入らざるを得なかった。帝のその凄まじいカリスマが、そうさせている。

「マスターユニットを破壊し、永劫に反復する無益で無駄な歴史を余は断ち切る。そして世界は、余の在りし真実の姿、”死の国”へと帰るのだ」

ひとしきり語った後、たつぷりと時間を置いてレリウスへ指示を飛ばす帝。

「退くぞ、レリウス。…………レイチエル」アルカード」

名を呼ばれたレイチエルは顔をしかめ、帝を見据える。

帝は顔を下方に居るレイチエルに向けるが、高い次元に居る実力の持ち主をも見下す視線である。

「此度は徒勞に終わったな。傍觀者がそれなりに努力はしたようだが……」

「それはどうかしら？貴方こそ、既に勝ったつもりで居るのは気が早いのではないくて？」

負け惜しみだった。

「勝負にすらならぬ」

「……………」

そしてそれを見抜かれた。

帝はレイチエルから興味が薄れたように視線を外す。そしてふと、ノエルにその目が止まった。

「…塵が…まだ存在^いたか…」

「…………え……？」

何かを呟いた様だが、ノエルには聞こえなかった。

しかし一瞬、ほんの一瞬だが、帝がこちらに明らかに嫌悪していたように感じる。

少し間をおいて、ハザマが切り出した。

「それでは皆さん、またお会いしましょう」

ファントムが正面を向くと、一陣の黒い風が吹く。まるで黒いカーテンが手品のように帝達を覆うかのように。風が止んだかと思うと、帝達一行は既に居なかった。

その様子を見ていたラグナはとうとう堪え切れず、右手の拳を床に叩きつける。

「クソオツ!!」

何回も何回も。重症のはずの体を無理やり動かして。

「クソツクソツクソツクソツクソツ!!...やっぱか...やっぱ、”そう”なのか...!」

何かを悟ったような、それでいてそれを悔しがっている。どうやらラグナ自身、こうなることは予測がついていたらしい。

ふと、傍にいたジンとノエルがラグナの方を向く。

「.....兄さん...」

「ラグナさん...動いたら、傷が...」

それでもラグナは全身から力を抜かなかった。
するとジンがラグナの前でかがみ、目線を合わせる。

「...兄さん。前に訊きたがっていたよね、あの日の事。今、教えるよ」

ジンは右手に持っていたユキアネサをラグナの前に差し出す。

「僕に、このユキアネサを渡してくれたのは……、……サヤだ」

そんな悲しい言葉だけが、辺りを満たした。

その言葉は、ラグナの中でいつまでも、いつまでも反復していた。

帝の宣戦布告とも言える、先ほどの出来事。

そしてジンから告げられた”あの日”の真実。

世界の破壊者。秩序をもたらす使途。神を殺す刃。神を宿す傍観者。悪を滅ぼす英雄。

世界を掌握する頂点。狂気の人形師。闇を這う蛇。

それぞれの役者達が、舞台を整え始めた。

イカルガ

「よし、動かしてみろ」

「…ん、よし。まだ違和感あるが、大分良いな」

「まだ無理して動かすなよ。下手をしたら根元からもげるからな」

カグツチのやや下層に位置するオリエントタウン。その一角に、捨て置かれた診療所があった。

そこに居たのはいつの間にか新しい左腕を生やしたラグナと、その調子確かめていたココノエだった。

ココノエは「マタビチャップス」と呼ばれる専用の飴を口の中で転がしながら、気だるそうにラグナの左腕を見ていた。

ここでラグナは、真っ先に思っていた疑問を口に出した。

「けどよ、何でアンタが俺にこんな事を？得も無えだろうが」

ココノエは目を閉じて、先ほどその依頼者に懇願されたシーンを思い出す。

「…滅多に頭を下げない奴にお願いされてな。直接会ったのはもう20年振り位だな…。お互い長生きでね」

ココノエとはラムダの一件で知り合っただけのラグナには、心当たりなど無かった。

右手を腰に当て、少し笑いながら礼を言う。

「とりあえず礼だけ言っとくわ。サンキュな」

「…ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ」

診療所を出て行こうとするラグナを引き止めるココノエ。

ココノエはポケットに手をつ突っ込みながら、真剣な眼差しでラグナを見ていた。

「その腕はラムダの再生槽で造ったものだ。…大事に扱え」

ぶっきらぼうにそう言われると、ラグナもまた真剣な表情で返す。

「……………ああ」

診療所の出入り口のドアが開閉する音が響くオリエントタウンには、まだ午後の日差しが上ったばかりだった。

カグツチの魔操船の発着場。巨大な時計がシンボルとなっているその場所で、時計に負けるとも劣らない目印がそこに立っていた。メガネ…否、サングラスか。とにかく目をそれで隠し、筋肉と赤色のタンクトップで体を覆う巨躯の持ち主。全長は2メートルは軽く超えているだろう。肌の色も赤と黄色の中間のような色をしてい

る。その体だけでなく両手も酷く不自然で、巨大なアームの中央から機械の拳が突き出している。

その巨人の名はティガー。ココノエの助手で、通称「第七機関の赤鬼」。ココノエが死に掛けていた傭兵を拾い、改造を施して”鬼”と呼ばれる生物の細胞を移植して造られたサイボーグだ。

ティガーは大声で視線の先に居る人物達に話しかける。ある人物を第七機関で保護することになっており、今はココノエの命で機関に戻る準備をしている真っ最中なのだ。

「おい、準備が出来たぞ！早くしろ！」

「だつてさー！ノエるん、急いで！」

同じく大声で「ノエるん」を呼ぶ少女は「マコト」ナナヤ」。彼女は亜人と呼ばれる種族で、人間と動物の中間のような肉体を有している。尻からは巨大で柔らかそうな毛を有した尾、帽子で隠れて見えないが動物独特の耳も生えている。そう、彼女はリス系の亜人なのだ。

統制機構の諜報部に所属する少尉で、「ノエるん」とは同期。彼女が危険な目にあっていることを察知し、第七機関に協力を仰いで現在に至っている。

「ノエるん」と呼ばれた少女は振り返り、ティガーとマコトに大声で返す。

「はい！…あ、ごめんなさい！もう少しだけ待って！」

「もー！5分だからね！」

その視線の先には、マコトの同期であるノエルと、黄色いフード付コートで全身を覆っている猫、六英雄の一人にしてラグナの師匠「獣兵衛^{じゅうへえ}」が立っていた。どうやらノエルと話をしていたらしい。ノエルは獣兵衛に深々と頭を下げた。

「……………獣兵衛さん、本当にありがとうございました！」

「構わんさ、好きでやっている事だ。お前の両親は俺が安全な場所に匿ったから安心しろ」

獣兵衛は笑いながら返す。

ノエルもつられて笑ってしまう。その拍子で聞きたかったことを忘れるところだったノエルは、獣兵衛に尋ねる。

「二人とも…元気でしたか？」

その疑問を聞いた獣兵衛は更に高らかに笑った。

「ふふつ、はははは！あの二人はお前に似ているな！ああいや、逆か？…伝言を一つ預かっている」

「え、どんなですか？」

「「統制機構をぶっ飛ばして来い！」、だ、そうだ」

物騒な伝言にノエルは少々顔を赤らめる。

「私はそんなに乱暴じゃありません！」

ノエルの憤慨に肩をすくめながら笑う獣兵衛。すっかり元気にな

ったノエルを見て安心したようだ。
そんなノエルに獣兵衛は続けて言った。

「とにかく頑張れ、ノエル。これから先は苦難の道かも知れん。
だが乗り越えて見せろ、ご両親のためにも」

そんな親のような言葉に感動してしまったのか、ノエルの瞳からは大粒の涙がこぼれていた。

元々ノエルは下落してしまった貴族、ヴァーミリオン家の復興の為に統制機構で尽力してきた。家族から愛されて育った彼女は、その恩返しをしようとしていたのだ。統制機構の事情を知るや否や、ノエルの無事を確認して応援の伝言を獣兵衛に託す辺り、本当の意味でノエルを愛しているのだろう。ヴァーミリオン家の復興など目もくれていない。

涙声でノエルは返した。

「うぐっ、ひっく… あい、頑張ります！」

ノエルの言葉を聞き、意志を確認した獣兵衛は頷いた。
その時、遠くから声が聞こえた。

「ノーエールー！もう時間だよー！！」

少々イラついた感じの声色でマコトがノエルに出発の時間を伝えていた。

ノエルは慌てて涙を拭き、マコトに大声で返す。

「あっ、はいー！！」

ノエルは獣兵衛に向き直る。

「獣兵衛さん、最後に……その、ツバキと少佐は？」

「すまん、あの二人の行方は俺にも解らん」

「そうですか……。でもあの二人なら平気ですよ！では、獣兵衛さん、お元気で」

「ノエル、お前もな」

それだけ言うと、ノエルはマコト達の待つターミナルの方へ駆けていった。これから待つ苦難へ立ち向かうように。

獣兵衛はノエルが去ったことを確認すると、どこか安心したように少しため息を吐く。

直後、その後ろから、誰かが姿を現した。ノエルが先ほど行方を知りがっていた、ジン＝キサラギだ。

「では…行くか、ジン」

「ああ」

獣兵衛の言葉に短く返事をし、ジンもまた、ノエルとは違う道へ進んでいった。

その光景を、人ごみから見ていた人物が居た。

漆黒の十六夜を身に纏ったその人物は、ジンとノエルが立ち去った事を確認すると、かつての友人の名を口にする。

「…………ノエル」

やがてその黒き人物は、人ごみへと姿を消していった。

「…………ふっ…」

カグツチの最下層を出て二時間ほど。太陽はまだ西に傾き始めたばかりだ。自然に囲まれて出来た空き地に腰を落ち着かせると、ラグナは自分の荷物の確認をする。

やがて確認を済ませると、少し間をおいて立ち上がった。

「さて…行くかね」

ラグナは彼方にある目的地に目をやり、歩き出そうとする。すると、突如草むらから何かが飛び出してきた。

「!」

敵か、と身構え、その影を視認する。しかしそれは、ラグナにとって思わぬ知り合いだった。

「待つニヤス待つニヤスいい人！タオも一緒に行くニヤスよー!!」

独特の耳フード付コート。尻から生えた尻尾は細く、コートの裾からは女性と思しき浅黒い肌をした足が伸びていた。

彼女の名はタオカ力。獣兵衛の血から生まれた猫一族、カ力族の一人。獣兵衛の血を引いているというだけあつて凄まじい戦闘能力を有しているが、世間知らずで天真爛漫。おまけに大食いというスぺシャル3セットを兼ね備えた少女だ。

ラグナはしかめっ面でタオカ力を迎えた。

「って、テメエタオじゃねえか！何でここに居んだよ！」

「猫の人が、いい人について行けって言ってたニヤス！だからタオは、どこまでえーも付いていくニヤスよ！そんでもって・・・美味しいものいーっぱい探すニヤス！」

猫の人とはいわずと知れず獣兵衛の事だ。どうやら獣兵衛に言われてラグナについていき、食べ物を探す旅に出るつもりでいるようだ。フードの下に隠れた真つ黒な闇の中にある二つの目は恍惚に輝き、口からは涎がダラダラ垂れている。

ラグナは若干冷や汗をかきながら苦笑する。

「来るな！！……って言っても来るんだよなきつと」

もはや諦めの境地に入ってしまったっている。内心余計な連れを増やしてくれた師匠にたぷりと”礼”をしたい気分でいっぱいだった。そんなラグナの気持ちなど露知らず、タオは首を体ごとかしげながら尋ねる。

「それでそれでいい人。一体全体どこに行くニヤスか？」

「ん？ああ、とりあえず「イカルガ」にな。ちいとばかり用が出来

ちまった」

「ほっほう？そこには美味しいものはあるニヤスカ？」

またも涎を垂らしながら、ラグナにジリジリと近づくタオ。

ラグナは身を引きながら再びしかめっ面をする。

「俺の知ったことか！！っーかあんまくっ付くんじゃねえ！！」

こうしてラグナも、ジンやノエルとほぼ同時刻に自分の道へ進んでいった。

太陽は、まだ燦々^{さんさん}と上空に鎮座している。

そんなラグナ達が旅路に出たのと同時刻。

二つ……いや、小っこいのも含めれば四つの影が、誰も見知らぬ平原に居た。

「猫といい、貴様といい……。全く何処まで甘いのだ」

影の一つ、ハクメンが小さく憤慨している。どうやらラグナ達に道を指し示した事を怒っているらしい。

だがそんな怒りを百も承知で、もう一つの影、レイチエルが言った。

「未来を変えるのは私達ではなく、彼らよ」

それが、まるで”彼ら”の使命であるかのように。
力あるものには決して開けぬ道があるとも言いたげに。

だがハクメンは揺るがない。彼は一つの信念の下、行動するのみ。
空であり、鋼であり、刃でもある彼は、ひたすらに悪を刈り取る剣
であり続ける。そう誓ったのだから。

「私は、私のやり方で変えてみせる。……………その誓いはこれから先
も変わらない」

それだけ言うと、ハクメンはレイチエルに背を向けて去っていった。

一人取り残されたレイチエルは、使い魔を置いて少し歩いてから、
静かに呟いた。

「…ラグナ…。例えこの先に何が待っていても…どんな事に遭って
も……………絶対に諦めないで」

レイチエルのその言葉は、使い魔達に聞こえることは無かった。

一陣の風が、彼女の髪を撫でるように吹き荒ぶ。

ラグナⅡザⅡブラッドエッジ。

ジンⅡキサラギ。

ノエルⅡヴァーミリオン。

そして彼らだけではない、様々な役者達。

彼らが運命に打ち勝つか、それとも運命に飲まれるか。

様々な思惑と感情が渦巻き、次なる舞台はイカルガへと移り変わる。

B L A Z B L U E - C O N T I N U U M S H I F T

T R U E S T O R Y

E N D

EXTEND | Relius Clover | (前書き)

確率事象による様々な舞台で、役者たちは様々な役割を演じてきた。
そこに、”狂気の人形師”が足を踏み入れる。

第十三階層都市カグツチ。貧富の差で上へと連なり、頂上にはカグツチの秩序を管理する組織、統制機構の支部がある。正門を開けるとそこはガランとしていた。本来なら統制機構の衛士達が事務やら任務やらで右往左往しているはずなのに。

正門を開けたその男は、その原因が何かを知っていた。”あの男”が衛士達を生贄にしたのだろう。紫色の外套から手を伸ばし、無精髭の生えた顎へと手を当てる男。

「……………さて…奴はどうしているか…」

ゆつたりと、非常にマイペースに喋る。”予定”通りなら既に奴は次のステップに移行しているはずだ。

男はそこまで頭の中で話を進めると再び歩き出した。

「レリウス「クロバー」」。金の仮面で顔の半分を隠し、体のほとんどを紫色の外套で包んでいる（誤解の無い様に言っておくがちゃんと服は着ている）。統制機構の技術部門で大佐の地位についており、その真性のマッドサイエンティストっぷりから”狂気の人形師”などと呼ばれている。彼が優先するものは己が実験するに相応しい存在のみ。それ以外は眼中に無い。決して感情で動くことは無い。あつたとするならそれは実験の素材に対する歓喜と期待のみ。

レリウスが何故カグツチの支部にいるのか。それはあるものを見るため、そして同じ研究者である、ある男が残したモノを探すためだが依然として探し物は見つからない。「アレも面倒なものを造ったものだ」と、独り言を漏らす。探し物が見つからないのならと、彼は頂上に向かって螺旋階段を延々と歩いていった。

本と錫状を手にした女神像が一望できる階段の踊場で、ふと天井を見上げた。

その時、鋭い殺意が彼を串刺しにしようとする。

「……………」

くるり、とターンを決め、攻撃を受け流す。殺意は自身の攻撃を避けたレリウスに顔を向ける。

顔はまるで陶器の様だった。くぼみと突起で人の表情を作っているものの、明らかに人間の顔ではない。レリウスは後ろへステップし、殺意の全身を見る。

メイドのような佇まいと形状。腕や胴体の各部首には紫色の塗装が施されている。レリウスより一回り大きい人形だ。

レリウスはそれが何かを既に理解していた。

「…エイダか。すると…」

「貴方がその名で呼ぶな！」

レリウスの声を掻き消すかのような怒号が、踊場全体に響き渡る。カツカツ、と靴音を立てて現れたのは、およそ殺意が満ちたこの空気には不釣り合いな少年だった。

少年はメガネを人差し指と中指でかけなおし、レリウスをにらみつけている。

「カルル・クローバー」。それが少年の名前だ。そして察しの通り、レリウスの実の息子だ。実父と似たような格好をしているが、彼は統制機構ではない。似た立場にある”咎追い”だ。

”ある出来事”から父を憎み、そして大人を決して信用しない。唯一頼れるのは、今はアークエネミー、機神・ニルヴァーナと化し

ている実姉、「エイダ「クローバー」のみ。

カルルが父をにらみつけながら言った。

「やっと会えたね……父さん。探したんだよ、本当に……」

「”探した”……？何故だ……お前のことはエイダに“任せてある”。何も問題は無かるう」

任せた。その一言はカルルに疑問を抱かせる。

エイダは確かにニルヴァーナへと変貌しているが、自分の意思で動くことなど出来なかったはずだ。何故そんな人形のような立場にある姉に、弟を任せたのか。

レリウスは、更に何かを思い出したかのように顎に手を添える。

「ああ……そういえば……エイダの事は”途中”のままだったな。だが……。……そうか……お前がエイダを“直したのか”」

「……“直した”……？姉さんを何だと思ってるんだ父さん！！姉さんを……僕の姉さんを……！」

「……あるモノを探している……。……そのためにエイダには協力して貰っただけだ」

カルルの憎しみを受けても、血を分けた家族をこんな目に合わせても眉一つ動かさない。それがレリウス。”狂気の人形師”。

あるモノ、という単語に再び疑問を抱くカルルを差し置き、レリウスは息子の傍を通り過ぎようとする。

だがその行為はカルルを更に激昂させる。

父を許さない、必ず亡き者にしてやる。

その殺意にが、カルルの持つアーケエネミーを突き動かす。

「姉さん!!」

ニルヴァーナの爪が実の父を貫こうと伸びる。

レリウスはそんな不意打ちにすら表情を変えず、薄気味の悪い笑みを浮かべている。ニルヴァーナに視線を移し、右手の指をこすり合わせて鳴らす。

乾いた破裂音と共に、レリウスとニルヴァーナの前に何かが姿を現す。

「イグニス」

”何か”はニルヴァーナと同じ形状をした爪で迎撃する。二つの爪は交差し、拮抗した。

「なっ!?!」

カルルは驚愕した。

”何か”の姿ではない。父の言った”イグニス”という言葉に。

「止めておけ…お前達ではコレには勝てない……。…無駄なことは無価値と…教えた筈だが」

「イグ、ニス……、イグニス、だと……?」

その言葉の意味と”何か”、そして実姉の姿を照合させる。

”何か”はニルヴァーナと似たような形状をしていたが、その塗装色は赤かった。頭上の帽子のようなものからはロップイヤーのようなものが垂れ下がり、レリウスに付き添っている。

そしてカルルは答を導いた。導き出してしまった。
レリウスはそんな息子の様子に、満足げな表情を浮かべる。

「ほう… 良い憎悪だ…。 流石は我が子という訳か」

普通の家庭ならば親バカと認識されてもおかしくない言葉だ。
だがこの家庭は普通ではない。狂気にすべての歯車を狂わされた、
もはや家族と呼ぶことも難しい人間関係へと変貌している。

カルルの中の何かが、今のレリウスの言葉で完全にぶちぎれた。

「…………… やはり貴方は悪魔だ！！！」

カルルの方向と連動するように、ニルヴァーナがもう一方の腕を
イグニスに振り上げる。

イグニスはニルヴァーナの攻撃を防ぎ、更にその動きを完全に抑
え込んだ。

その隙にカルルは双方を飛び越え、レリウスへ憎悪の一撃を叩き
込まんとしていた。懐から飛び出すチエスのナイトの様な金色の人
形。それが持つ槍がレリウスを襲う。

レリウスも外套から何かを出現させる。緑色の塗装を施した巨大
な腕。それが自身を保護している。

今、憎悪一色に彩られた家族戦争が始まった。

「姉さんだけでなく母さんまで！！許さない、僕は絶対に貴方を許さない！！」

怒声と共に繰り出される拳とナイトの槍。だが攻撃はダンスのようなターンで受け流され、隙が生まれたところにかぎ爪と巨大な腕が襲い掛かる。

カルルとニルヴァーナは異様な夫妻の攻撃を受け、後退する。だがそんなことを考えている場合ではない。

続いてレリウスは外套から何かの器具を垂らす。器具は地面に着地すると同時に何かを上部に吐き出す。吐き出されたのは先ほどの巨大な腕。ビックリ箱の原理で飛び出してきた緑色の巨腕は真っ直ぐカルルに向かっていく。

「クッ……！」

思わず飛び上がって攻撃を避ける。しかしそれは少々浅はかな回避行動だ。空中では鳥でもない限り自由が利かないのだから。

レリウスは容赦なく空中にいる息子に狙いを定める。ただし攻撃

するのは彼ではない。

「ハース」

「あつ…！？」

その妻であるイグニスだ。

イグニスは縦に回転し、まるでノコギリカッターのようにカルルに突進していく。

カルルは咄嗟に防御したが流石に力でイグニスには適わない。鈍い音共にカルルは後方に大きく吹き飛ぶ。何とかニルヴァーナを落下地点に呼び出し、受け止めてもらったが激突時の衝撃までにはくせない。

「…姉さんありがとう。…ううん、戦うよ。ここで勝って、必ずあの人に姉さんや母さんのことを謝らせる！」

ニルヴァーナとカルルは顔を見合わせ、本当に会話しているかのような光景を作るが、実際に声を出しているのはカルルだけだ。果たしてニルヴァーナはカルルの思っていることを本当に伝えているのだろうか。

レリウスは変わらず立っている。イグニスは攻撃があたった後すぐにレリウスに付き添っている。

「……………」

おそらく様子を見ているのだろう。カルルとニルヴァーナが顔を突き合わせているのを黙って見ていた。

カルルはニルヴァーナに一言言った後、レリウスに向かって跳ぶ。

「アレグレット!!」

そのまま外套から無数の槍を繰り出す。直撃すれば穴が空くだけではない。

横にステップして避けたレリウスはイグニス呼び寄せ、右腕を再びカルルに向けて指さす。

「イグニス…いけ」

イグニスは再びノコギリカッターでカルルに突進していく。

だがカルルは咎追いでもトップクラスの實力者だ、何回も同じ攻撃を喰らうはずがない。カルルもニルヴァーナを呼び寄せ、イグニスを指さす。

「アニマ!」

ニルヴァーナは突っ込んでくるイグニスに自ら近づき、両腕でイグニスの動きを捕らえる。

カルルもレリウスも基本戦法は”相方とのコンビネーション”。相方を使って相手を攪乱するのではなく、攻撃同士を組み合わせて効果を更に増幅させるのだ。だから相手の相方を捕まえてしまえば当然攻撃力も落ちる。カルルはレリウスの相方であるイグニスを抑えることで力を削げば勝てると思っていたのだろう。

カルルは好機とばかりに再びレリウスに近づく。

「…ほう…」

外套から巨大な金色のナイトを出し、馬の足で踏みつけようとする。

だがカルルは失念していた。父もまた自分と同じ人形使いである

ことを。

しかも、自分より身体能力が上であることも。

「だが……甘いな…カルル」

「なっ！」

レリウスは真上に飛び上がってカルルの攻撃を避ける。彼が居た地面はナイトの馬の足で輝が入っている。そのまま歯車が横に添えられた右足を突き出し、カルルの頭蓋を狙う。

カルルはどうか体をそらして、右頬を歯車が掠める程度で済ます。吹き出る血を拭いながら後退する。

「……………イグニスが無力化させるということは…エイダもまた動けなくなる…ということだ。そのことを頭に入れておかなかったのは……………失敗だったな…」

レリウスの言うとおりだ。カルルもまたコンビネーション攻撃を得意とする。イグニスの相手をニルヴァーナにさせれば攻撃力が落ちるのはカルルも同じだ。

仮面を付け直し、レリウスは言葉を続ける。

「加減してやつても…私に傷一つ付ける事も出来んとは……………。…だが…見込みはまだあるな…」

「このお……………！よくもそんな口を……………、……………！？なんだ…？」

言い返しの言葉が紡がれる瞬間、カルルの周りの空間が歪み始めた。歪みは大きく波打ち、カルルを飲み込んだかと思うとすぐに収まった。だがそこにいたはずのカルルの姿は無かった。ニルヴァー

ナもカルルの後を追うように消える。拘束から解放されたイグニスもまた、ニルヴァーナと同じように消えていった。

「…転移魔法…ファントムか…。……………、…なるほど…しくじったな…ハザマ」

実の息子が激昂しながら消えていったというのに顔色一つ、声色一つも変えないレリウス。自らの中で今起きた事象が何なのか解析を終えると、再び頂上に向かって螺旋階段を歩き出した。

その表情は、相も代わらず不気味で気味の悪い笑みで飾られていた。

巨大な黒い建造物。吹き荒ぶ風。そして災厄を予感させる、黄金の雲で塗りつぶされた空。その光景の中に一人、仰向けで倒れていた男がいた。

統制機構諜報部所属、階級は大尉、胡散臭い柔和な笑みと漆黒の服装と帽子がトレードマークの男の名は「ハザマ」。秘められた凶悪な正体を隠しながら、統制機構で何かと暗躍を続けている。

ハザマは満足げな顔で気を失っている”フリ”をしていた。先ほどまでは本当に気を失っていたが、面倒なのでそのままフリを続けていた。

（痛え……あのヘタレ野朗…次あったら絶対泣かす…）

ハザマの体はズタボロだった。服も肉も引き裂かれ、全身に力がまるで入らない。それは先ほどまで戦っていた男につけられた裂傷だった。

ハザマが独り言を脳内で喋り終わると、カツカツと靴音を立てながらやってくる者が居た。レリウスだ。

レリウスはハザマを見下ろしてから言った。

「…どうしたハザマ？何故寝ている？起きろ…」

「ゲホツゲホツ！…たく、遅えよ来んのがよ…」

やってきた男を睨み付けながら上体を起こすハザマ。どうやら目の前の変態はこの光景と状態が睡眠をとっているように見えたらしい。

「それは済まなかった…。だが…休息を取るなら”ここ”は問題があるぞ。休むのなら自室に行くと良い…」

あくまでその話題をやめないレリウスに、ハザマは殺意を軽く覚える。

ハザマは口元の血を拭いながら言った。

「つかテメエ…見てわかんねえのかよ…？俺様今、重症…瀕死の重症なの…！」

「瀕死………？…ほう…お前が瀕死とは…珍しい。試しに一度死んで見せてくれ」

「悪魔かデメエ！…ガハツ！」

外套から伸びる巨腕を見て叫ぶが、その拍子にまた喉から血が上ってきた。

レリウスは「冗談だ」と巨腕を仕舞うと辺りを見回し始めた。

「…探し物は見つかったのか？」

しばらく沈黙は続いていた。が、ハザマが突然切り出した。

レリウスは元々その探し物のためにカグツチに来ていた。だが今のところ、探し物の片鱗すら手に入っていない。

「…いや…」

「確か、”クシナダの楔”だったか……。アレにそれほどの価値があるとは思えねえんだがな…」

「「蒼の男」はどうした？それに何故お前は死んでいない？」

「こつちの話ガン無視かよ…。つかそうなんだよ…あの野郎、とどめもささずクサナギを追っていきやがった…！シスコンも大概にするよな…何のためのライフリンクなんだかわかんねえじゃねえか…」

「蒼の男」…「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」との先刻までのやり取りを思い出し、ハザマはイラついていた。

レリウスはそんなハザマを見ながら、仮面を押し上げた。もう一押ししなければ、ハザマ達の計画は完遂しない。そう思ったのだろ

う。

ハザマもそんなレリウスの雰囲気を感じ取ったのか、不意に立ち

上がる。

「仕方が無い……」

レリウスが呟く。

「……起動”しろ……碧の男”……私が”逝”くってやる」

「碧の男」と呼ばれたハザマは、面倒くさそうに自身の肉体にかかった拘束術を解く。するとハザマの周囲に方陣が現れ、凄まじい魔力と生命力が肉体に補充されていく。

自分の肉体である”碧の魔導書”を起動させた「碧の男」は、目の前の人形師に忠告する。

「別に構わねえんだけどよ……。俺は”アンタに”殺されちまったら意味無えんだけど……？」

「問題ない。………ファントム」

レリウスの呟きに応じるかのように、数メートル離れた地点の空間が歪む。やがて歪みが収まると、紫色のトンガリ帽子と外套のみを纏った異様な人型が現れた。

レリウスは更にイグニスを呼び、命じる。

「イグニス……ファントムと同期しろ」

「ったく……あの野郎がとつと止めを刺しとけばこんな面倒な事あしなくて良かったのによぉ……」

ため息をついた後、再び忠告するようにレリウスを見る。

「つーが大佐さんよお、俺多分加減出来ねえぜ？」

「…問題は無いと…言った筈だが。…イグニス」

指を鳴らし、相方を消す。

いや、正確には”ハザマの後ろに移動したのを悟られないように”消した。

間一髪気付いたハザマは自身の武器、アークエネミー、蛇双・ウロボロスを宙に向かって伸ばす。ウロボロスの先端である蛇の牙が何も無いはずの空間に噛み付き、アンカーの役割を果たして持ち主の体を引っ張った。イグニスの爪は標的を見失って空振る。

ハザマはそのままレリウスを飛び越えて着地する。

「まったく…こちとら瀕死の重症様だぞ…！あんま派手な動きさせんな…っとお！」

レリウスは着地したハザマを休ませることなく、外套から伸びる青白い人形の腕で襲わせる。

ハザマは屈んでこれを避け、右足に魔力と力を集中させる。

「崩ッ天刃ッ！！」

蹴り上げから放たれた衝撃は、まるで翼を模っているかのように天に伸びて空を裂く。

標的の男は同じように間一髪のとこで身を翻して、攻撃を受け流した。

「イド・ロイガー」

続けてレリウスの反撃。もちろんハザマも身構えて避ける………
という流れにはならなかった。ラグナとの戦闘のダメージが足を引
つ張ったのだ。咄嗟に力が入らず、レリウスの繰り出した巨腕の一
撃が胴体に直撃する。

体が大きく後方に投げ出される。地面を二、三回バウンドし、傷
付けられた体を更なる衝撃が貫く。

普通なら絶対に立ち上がれないであろうダメージを受けながらも、
碧の魔導書の力で強引に体を動かし、ハザマはレリウスをにらみつ
ける。

「だからよお……………」

そして体を大きく後ろに反らしたかと思うと、

「俺様は……………」

ハザマの姿が消えた。

否、速過ぎて見えなかったただけかもしれない。だが確かにそこに
いたはずのハザマの姿が消えてなくなった。

「瀕死の重傷だって言っただろうが変態野郎があああああ！！
！」

咆哮と同時にレリウスの背後からサマーソルトを喰らわせる。レ
リウスの体は為すすべなく宙に浮き、ハザマにとってこれ以上ない
チャンスになった。

「ウロボロス！！」

すぐさまウロボロスを召喚、レリウスの体に噛み付かせる。

そのまま強引に、碧の魔導書によってもたらされる生命力を存分に使うが如く、力の限り獲物を地面に叩きつけた。それも一度ではない。地面に激突した瞬間全力で引き上げ、また宙に浮かせたかと思つと再び地面に叩きつける。

何度も。

何度も。

何度も。

「オラオラオラアア！！」

何度も同じ事を繰り返し、やがて止めと言わんばかりに最後にまた思い切り地面に叩きつけた。それからウロボロスをしまい、様子を見る。

常人なら最悪手足が千切れてもおかしくないほどの衝撃だった。

しかも何度も何度も宙から地面に衝突するたびに骨も折れるし、肉も叩かれる。本当に常人ならまず生きては居ないだろう。

ハザマはピクリとも動かなくなつたレリウスの体に近づいた。

「…………ヤベエな。流石にやり過ぎたか…？」

怒りに任せて行つた攻撃を悔いるハザマ。

これでは本末転倒だ。自分はこれから死ななければならぬのに、と思つた矢先にハザマは不振なものを見つけた。

「…！？まさか！？」

レリウスを中心に半径五メートルほどの方陣が地面に描かれている。不意にレリウスの両腕のみが持ち上がり、方陣にスイッチを押す間隔で両手を押し付けた。

するとたちまち巨大な歯車たちが地面から立ち上り、歯車が噛み

合う隙間にハザマの両腕両足が巻き込まれていく。

「ゴッ………オアア……!!」

ただでさえ瀕死の重傷なのに傷口に塩をすり込まれるより倍ぐらの激痛がハザマの体を襲った。

どうやら狂気の人形師の辞書に、“良心の呵責”という言葉は載っていないかららしい。

レリウスはその後、何食わぬ顔で立ち上がってハザマを見る。

「…逝け…ハザマ」

指を鳴らしてイグニスと呼び寄せるレリウス。

拘束されたハザマは激痛に耐えながら邪悪な笑みを浮かべている。そしてふと、天を見上げて吼えた。

「クククク………ッヒヒヒヒ!!ヒヒヒハハハハ!!ヒャーッハハハハッハハハ!!」

イグニスがハザマに止めを刺そうと腕を振りかぶる。

「待ってやがれ!!タカマガハラのクソ野郎共お!!ヒャーハハハハハ!!」

ひとしきり笑って、一泊置いた後にハザマは最後の言葉を繰り出す。

「…殺れ」

狂気の人形師はたたずんでいた。

自らと目の前の男の血が染み込んだ衣服を纏い、隣には人型の兵器を従えて。

そんな目の前の男はいまや血の海に沈んでいる。胴体の中心に大きな空洞を作って。

「……………出来れば…クサナギをこの眼で観測たかったが…」

不意に男が言う。

「それに…」クシナダの楔”…。…私もまだ未熟か」

男は後ろを振り返る。

そこには役目を終えた巨大な祭壇がある。先ほど、”蒼”を継承した少女を迎え入れるという役目を終え、静かに男と共にたたずんでいる。

頂上は、まだ強風に曝されている。

EXTEND | Relius Clover | (後書き)

ども、ミツルギです。

いやーエクステンド楽しみですね！というわけで、アーケード版レリウスⅡクローバーのストーリーを小説化してみました、いかがでしたでしょうか？

ハザマの新DDは是非とも入れたかったので、レリウスさんにはご愁傷様って事で…しかしレリウスちよつと強過ぎたかな…。

また「コンティニューアムシフト」…なんとかかんとか「みたいな続編が出ない限り、この小説はコレで幕を閉じます。では、最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5340x/>

BLAZBLUE —CONTINUUM SHIFT—

2011年11月20日02時10分発行